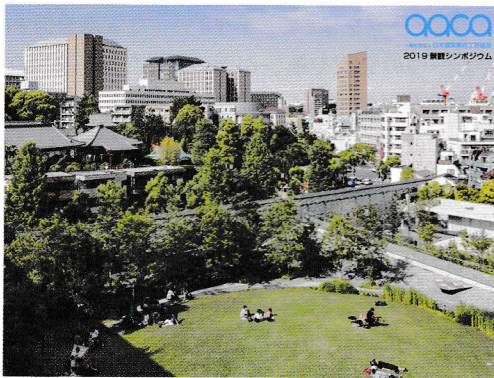




aaca 景観シンポジウム

「場の力で多様な価値を繋ぐ」

未来に向け、私達はどのような価値基準で建築・都市を考えるのか？
～早稲田アリーナ等を通じて～



日時：令和1年12月17日(火) 15:00～17:30

第1部 講演会 15:00～

第2部 パネルディスカッション 16:40～

会場：早稲田大学 27号館 小野記念講堂

<モデレーター>

佐々木 葉氏(早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授)

<パネリスト>

北野 寧彦氏(早稲田大学キャンパス企画部調査役)

水越英一郎氏(山下設計)

吉村 純一氏(プレイスメディア・多摩美術大学教授)

笠原真紀子氏(清水建設)

主催 一般社団法人日本建築美術工芸協会

後援 (一社)日本建築学会、(公社)日本建築家協会、(公社)日本建築士会連合会、(一社)日本建築士事務所協会連合会、
(一社)日本インテリアプランナー協会、(一社)日本美術家連盟、(公財)日本美術協会、稲門建築会

司会 本日のシンポジウムは、「場の力で多様な価値を繋ぐ」と題しまして、途中、休憩を挟みながら2時間半ほど予定しております。1部の終了予定時刻は16時30分を予定しておりますので、ご了解頂きますようお願いいたします。

それでは、講演に先立ち、当協会の会長、岡本より皆さまにご挨拶を申し上げます。岡本会長、よろしくお願いいたします。

岡本 皆さま、こんにちは。年末のお忙しい中、aaca シンポジウムにお集まり頂きましてありがとうございます。aaca では年2回大きなイベントとしてシンポジウムを開催しておりますが、このシンポジウムをはじめ講演会やフォーラム、さらには色々な施設の見学会など、様々な事業企画を行っています。aaca の創立者、芦原義信先生の理念である美しい都市景観を創造するということにふさわしい、その時々の一



番ホットな話題やプロジェクトの紹介、それからその時々で最先端で活躍している方々をお招きして、様々なお話を聞いて情報発信をする場を設けています。

今日はその一つで、aaca 景観

シンポジウムですが、早稲田に新しい都の西北、早稲田の杜ではなく、新しい丘ができたということで、話題になっております。これについて様々な立場でご参加いただいた方々から、大変興味深いお話が頂けるのではないかと考えております。私も先日、現地を見させて頂きましたが、今まで考えもしなかったような場所に、新しい緑の丘ができて、その下には広大なアリーナ空間というような、とても貴重な体験をさせて頂きました。

今回のテーマは、「場の力で多様な価値を繋ぐ」ということで、このような場所にこのような緑の丘をつくるというような発想、これはまったくユニークな発想ではないかと思いますが、どうしてこのような発想に至ったのか、これを実現するまでにどのような議論が交わされて、どのようなご苦労があったのか、それからその場が都市の中でどのような価値を生み出したかというようなことを、ご関係の方々にお話し頂ける良いチャンスができたのではないかと考えております。ご登壇頂ける先生方、よろしくお願いいたします。これから貴重なお話を聞かせて頂くことを楽しみにしております。

aaca は来年に向けても多くの企画展開を予定しております。景観シンポジウム、それから講演会等の様々な企画がございます。是非これからも皆さま方、その事業に参加して頂いて、aaca をご支援頂くようお願い申し上げます。簡単ですが私の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。(拍手)

司会 岡本会長、ありがとうございました。それでは、只今より第1部を始めたいと思います。まずは山下設計の水越様

より本シンポジウムの趣旨説明についてお願いします。水越様、どうぞご登壇ください。

水越 山下設計の水越です。シンポジウムに先立ちまして、本日の趣旨についてお話をしたいと思います。今回の講演タイトルは、「場の力で多様な価値を繋ぐ」、未来に向け私達はどのような価値基準で建築・都市を考えるのか?です。このようなタイトルにした背景ですが、建築物は土地に固定されていて、その条件の中でつくっていかねばいけない宿命にある訳ですが、その中で出来ることとして、設計者達の細やかな観察の中からそれぞれの場所が持つ潜在的な力や固有の力を引き出すことによって、多様な価値を繋ぎ合わせて持続性の高い建築や都市をつくれませんか…等と考えたためです。

少し歴史を振り返ってみますと、19世紀以降の高度経済成長期には経済至上主義ということで、世界中が「成長」という一つの目的に向かって邁進してきました。その過程において、いろいろな技術や産業が生み出されて、私たちの生活が飛躍的に向上してきたと思いますが、その一方で生態系の破壊、地球温暖化、化石資源の枯渇など、多くの課題も抱えるようになったのだと思います。

こういう時代を経て、現代は多様な価値観を尊重しながら、成熟した社会像や生活を模索する時代になってきたのではないかと。そういう意味では高度経済成長期の「成長」だけを目指す時代から、いろいろな価値観が共存する時代になってきたのではないかと。このような考え方が地域や地球の持続性を高めたり、未来の私たちの生活に新たな豊かさをもたらすのではないかと考えている訳です。

このような動きの代表的なものに国連が掲げるSDGs(図1)があります。SDGsでは持続可能な開発目標の設定と、その実現に向けた方策の立案を目指して、大きく17のテーマが掲げられています。また、その前提として、「経済」「社会」「環境」の三つの要素が持続的に成立することを目指している訳ですが、現代は色々なことが同時に成立していかなければいけない時代だと思います。つまり、私たちの生活と建築・都市・地域・地球環境というのは相互に影響し合って成り立っている訳です。

本日ご参加の皆さまも、日頃からそれぞれの立場で現状

を改善しようとか、未来に向けて新しいことをやっというように様々な活動されていると思います。そんなことが繰り返されて今の社会ができているのだと思います。その一方でこんなことも起きています。これは一つの例ですが、エアコンを発明した人は人々の居住環境を高めるためにエアコンという新たな技術を生み出しました。ところがそのエアコンという技術が結果的に社会全体の消費電力量を押し上げてしまったり、化石エネルギーを異常な速度で使ってしまったり、オゾン層を破壊して地球温暖化を招いたりといったように、発明者の意図とは異なる部分で、結果的には地球にかなりのダメージを与えてしまうといった事態を引き起こしています。一つの発明や解決が別の新たな課題を生み出してしまふ。こんな現象が色々な所で起きているのだと思います。

ここで改めて考え直してみたいのが、バックミンスター・フラーが提唱した「宇宙船地球号」という概念です。有資源である地球を一つの宇宙船と見立てて、この中で起きる様々な活動の関係をきちんと解き明かして、全体の持続性を高めていく。つまり、ものを考える時に、ミクロとマクロ、グローバルとローカル等、様々な視座に立って、総体としてどういう価値が生まれてくるのかということを中心に考えていかないと、地球自体が維持できないのではないかと考えています。

今日は皆さんと一緒に、生活・建築・都市・地域・地球のそれぞれが時代とともに改善されつつ、また持続性を持つというのはどういうことなのかについて考えてみたいと思います。これは難しいテーマですので、すぐには答えが出ないと思います。ただ、皆さんが個々に考えるきっかけになれば良いと思っています。

今、画面に映しているのは、私どもの事務所で数年前に作成したプロジェクトの特性を評価するためのレーダーチャート(図2)です。機能性、社会性、経済性、環境性能という四つのキーワードを主軸に更にこれらを細分化してレーダーチャートをつくっています。本来であれば、すべてのプロジェクトで満点を取れば良いのですが、なかなかそうもいかないのが実情です。実際には機能性と経済性だけを重視して欲しいといったプロジェクトもたくさんあります。このような時、どういう価値観でものを考えていくかということ客観的に見える仕組みみたいなものがあれば、それぞれ



図 1

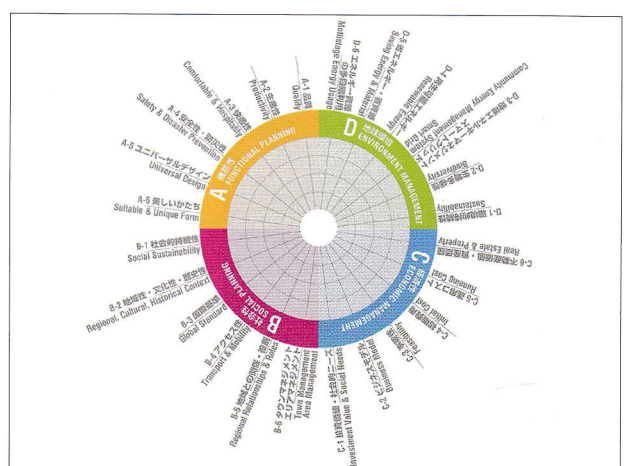


図 2

のプロジェクトの位置づけが明確になりますし、また、全体との関係が見えることで、設計者や発注者が色々なことを考える一つのきっかけになるのではないかと思います。

今日は「場の力で多様な価値を繋ぐ」を主題にお話を進めて行きますが、最初に登壇するメンバーについて紹介したいと思います。今回はモデレーターに早稲田大学創造理工学部社会環境工学科の佐々木葉先生をお迎えしました。早稲田の建築学科を出られて、そのあと土木の研究に携われた後、現在は社会環境工学科の教授をされている佐々木先生に建築と土木の2つの視点から話題提供をして頂こうと思います。その他の登壇者は早稲田アリーナの建設に関わったメンバーですが、発注者から早稲田大学キャンパス企画部調査役の北野課長、今回のランドスケープデザインを担当して頂いたプレスメディアのパートナーで多摩美術大学教授の吉村さん、設備の設計をして頂いた清水建設の笠原さん、そして建築の設計を担当した私の5人となっています。それぞれの立場でこのプロジェクトをどう考えてきたか、そして、早稲田アリーナだけではなく、このプロジェクトを一つの題材にしながら、「場の力で多様な価値を繋ぐ」とはどういうことなのかということについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

それでは佐々木先生、よろしくお願いたします。

佐々木 皆さん、こんにちは。今ご紹介頂きました早稲田大学創造理工学部社会環境工学科というところにおります佐々木葉と申します。皆さんのフライヤーの後ろに本日登壇するメンバーの簡単なプロフィールがあるかと思いますが、私自身も建築学科の卒業で、このあとプレゼンテーションされる方が、実は後輩だったりします。建築学会の会員でもありますが、土木にずっといるので、最初に自己紹介をさせて頂こうと思っています。

私は1984年に早稲田の建築を出ました。その頃は就活もなかったですし、だいたい女子は総合職で採ってもらえない。そういう時代ですから就職とか非常にのんびりしていて、2月にどこかアトリエに行くかな…みたいに思いながら、でも4年生の頃、あまり建築の設計は得意ではなかったのもうちょっと風景の一部としての建築みたいな仕事ができないか

なみたいに思っていて、そういう仕事は、例えば、道と建築の間のスペースみたいなところのデザインは誰がやるの。日比谷花壇ではないのとか言われた時代です。

そんなことでうろうろしていたときに、1冊の本と出会いました。これが『風景学入門』という中公新書で82年に出たものですが、中村良夫先生という方がお書きになったものでした。この本はとて難しくて、今読んでも分からないのですが、学生の頃に、あ、なんか、この先生、格好いい。この先生のところに行こうと思って、中村良夫先生は当時、東工大におられたのですが、そこに行ってから中村先生は土木系の先生でしたので、それ以来、土木系の先生のもとで景観研究をやることになりました。あちこちいろいろ転々としながら2003年に早稲田に戻ってきまして、景観・デザイン研究室を構えることができています。研究室のウェブサイトにも私たちの研究室の目標は「豊かな風景、豊かな空間の生成による幸せな時間を、すべての人が過ごすことができる社会を実現すること」と掲げていますが、これを究極の目的にしながら、いろいろお節介な仕事をしようとしています。

色々なことをやっているのですが、イメージとしてこのようなことを研究なり、実践でやっています。例えば、古い歴史的な橋をもう一回つくり直すとか、最近では新潟で湿地をめぐる地域のデザインをしたり、小さな村の景観計画を作ったり、20年くらい付き合う自治体の中でいろいろな景観づくりをやったりしています。海外だと、ニューヨークが面白いなと思ったりしているのですが、基本的には景観とか風景という切り口から地域のことを考える仕事をしています。今日のシンポジウムも景観シンポジウムですので、景観という言葉は皆さん、それなりのイメージあるいは専門的なことを思っているんじゃないと思うのですが、こんな考え方もできるかなという



佐々木葉氏

1961年神奈川県生まれ／1984年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1986年東京工業大学大学院修士課程修了／東京大学、名古屋大学、日本福祉大学などを経て2003年より早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授

ある場所から見える眺めを保全する。写真に写る風景をきれいにする



図 3

開発計画：御谷戸騒動1964年



図 4

お話を次の議論の前座としてさせて頂ければと思っています。

例えば景観というのは、ある場所から見える眺めを捉える訳です。(図3) やはりそれを保全したい、良くしたいというモチベーションのもとで語られる訳ですが、ある場所から見るということは、ある場所から撮った写真というように見えてくる。これは鎌倉の鶴岡八幡宮です。鎌倉はご存じのように、三方を囲まれて、軸が通っていて、ここに八幡様がある。非常に重要な存在ですね。高度成長期のころに住宅開発の波が鎌倉にも押し寄せていって、御谷騒動と言われるものが1964年に起きました。(図4) 鎌倉に住んでいる大佛次郎とかそういう人たちもブルドーザーで裏山が削られるということに対して非常に反対をした訳です。

すごく簡単な模式図(図5)でいうと、海から見て、鳥居の先に山があって、この山の上を開発するのはいかんでしょいうことになって、反対運動のかいもあって、1964年に古都保存法ができ、この軸を中心として、その背後の山が歴史的風土保全地区という形で保全されるようになった訳です。つまり、こういうことにならないように、背後の山が守られる。ここの部分も守られるようになった訳です。

一方、見えなきやいい。ここは開発してもいいということに、結果的にだんだんくなってきて、狭い意味でのあるところから見た八幡さまの裏山は保全されましたけれども、地域景観としての構造は大きく変化するということがありました。その結果、航空写真で見ても、この裏側には相当たくさんの開発が進んでいて、この三角のところが私の家なので、小学校のころなどに裏山がどんどん開発されていくのを見ていたということです。

少し景観や風景という言葉を見てみますと、日本語では景色という言葉が平安時代に使われていて、それは人の様子だったり、人の怒れる景色の何とかみたくに読み取れるものであったのですが、ほぼ同じ時期に中国大陸からの単語として、風景という言葉も入ってまいりました。ただ、これが使われるのは非常に限定的だった訳です。

一方、景観という言葉は明治時代にたくさんの日本語を海外から入ってくる概念に当てていくという過程の中で、ドイツ語のLandschaftの略語として生まれた訳ですから、日本語としては風景に比べると非常に新しい言葉です。ただ、建築

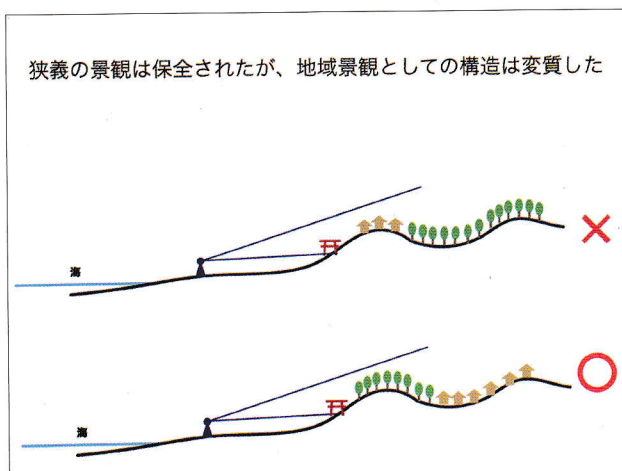


図5

や都市のデザイン、今日で言う景観を考えるとときに、戦前では景観という言葉よりは美観という言葉がよく用いられています。もう一つ、風致という言葉もありますね。特に公園や都市や森林のような緑が多いようなところでは風致という言葉が使われておりました。

1960年代にもう一度、景観という言葉が新たに私たちの分野の中で出てきますし、芦原義信先生が『街並みの美学』というようなご本を書かれるようになったのが70年代くらいですが、60年代の後半くらいから土木の分野の人たちが景観というものをエンジニアリングの対象として学問として作っていきこうと。その後、1980年代くらいにブームが起きてきたりします。

その後、ちょっと景観がブームになりすぎて、やや化粧のように捉えられたことへの反省も含め、90年代くらいに風景という言葉が脚光を浴びつつ、2004年に景観法という法律ができてから、景観という言葉がまた出てきたりしています。このように景観およびそれに類する言葉は時代とともに多様な形でわれわれの中にあつた訳ですが、景観とは人間を取り巻く環境の眺めにほかならないというふうに、私が出会った『風景学入門』を書かれた中村先生はおっしゃっています。

これをちょっと模式的に考えてみますと、人間と環境があって、そこを眺めとして見た。これが景観という訳ですが、当然のことながら環境は人の生業、社会システム、これが相互に関係しながら存在していて、主体は人の一部であると同時に、この眺めの主体もこの影響を受けていく訳です。こういう図式である程度、考えられるというふうに思います。ただ、今やはり主体というものが一つの代表的な主体を考えづらくて、少しずつ似ているけれども、ずれているような主体がそれぞれ眺めを見ている。その眺めがトータルなものとしての景観と捉えることが必要なのではないかと思います。つまりこの場所から見た眺めを考えれば良いという話ではない。

一方、この眼差しの対象になっている環境というのものも、もちろん今見えているのは、この時点のものな訳ですけれども、人によっては昔どうだったかな、あるいはもう少し前はどうかだったかなという、時の履歴のようなものも含めて、昔こうあったものがこう変わったんだよねというような見方も当然し

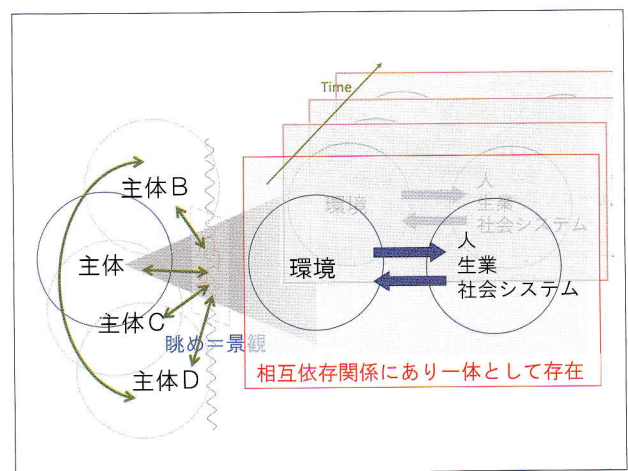


図6

ている訳です。ですので、主体側も少し固定的にこれというふうにも言えないですし、見えているものも本当に今存在するものだけとして、われわれは景観とか風景を見ているかという、必ずしもそうとは言えないのではないかと。もっと非常にふわっとした、言い方を変えればダイナミックな現象として風景というものを捉えながら、こういう思考のもとで環境や地域の計画をしていきたいと思っています。(図6)

こういう一つ概念モデルと言うと大げさですが、そういうところで風景を考えていくときに、ここからいろいろ話の展開があり得る訳ですが、私は風景というようなものも公共の空間をデザインしたり、大きな地域の行政計画を議論するときにも重要なのではないかと考えています。というのは、それは風景を媒体として、私一人一人の内面とか、ときのレイヤーのという考え方に至ることができるのではないと思うからです。

今どんどんみんな一人ずつ、自分の中にももっていたり、あるいはスマートフォンの中に思いがどんどん行っている中で、ふとしたことで眺めを見ます。ああ、山が見えるとか、さらに、その向こう側にはちょっと前のこととか子供時代の昔の記憶がよみがえってきたりする。それを見ていると、他にもこれを見ている人がいるよね…というような状態で、内にみんな一人一人がばらばらでいたような人が漠然として、ちょっとぼわっとしているようだけれど、ちゃんとそこにある目に見える眺めを見る。その眺めに色々な思いを重ねていくことで、柔らかい繋がりのようなものがある。そこが場としての社会というものに繋がるのかな、なんていうことを思ったりしています。

そんなことを考えながら、この度つくられた早稲田アリーナですが、グーグルで画像検索していくと、こんな映像がワットと出てまいります。見てみますと、当然今つくられた新しいものもあれば、中で行われている卒業式や入学式のイベントとして参加した人の記憶もあれば、ここはかつて記念会堂だったという、まだ多くの人の記憶に新しいものができて、これらとセットで今のアリーナというものが考えられている。こういった多重的な存在として早稲田アリーナはあるんだなという感じがいたします。

そういったような、なんとなく曖昧で分かりづらいかもしれ

風景的思考による建築と空間のデザイン

- どれだけ多くのレイヤーをデザインのテーブルにのせられるか
- どれだけ異なる視点をデザインのプロセスに組み込めるか
- どれだけ違った場面をそこに重ねられるか
- その上で、長続きする共有の姿をくっきりと描き得るか

図7

ませんが、ぼわっとしながらも、何かそこに重なりつつ、そのレイヤーを共有できるというような可能性を考えると、仮にここで「風景的思考」と呼ぶならば、そういった感じに基づいて建築や空間をデザインしていくことは、どれだけ多くのレイヤーをデザインのテーブルに乗せられるか、どれだけ異なる視点をデザインのプロセスに組み込めるか、どれだけ違った場面をそこに重ねられるか。でも、その上でそこにある存在としての空間や建築というのは長続きする共有の姿として、一人一人ちょっとずつその思い描くものは違うかもしれないけれども、くっきりと描き得ることができるというような思考でデザインしていったりする。そういう「風景的思考」によるデザインということも楽しいかなと思っています。(図7)

『星の王子さま』に「大切なものは目に見えない」という台詞があります。私が景観の勉強を始めたころに、うそだ。ちゃんと大事なものは全部目に見えるんだよと思っていましたけれども、これは大事な言葉が省略されているのだなと最近、思うようになりました。大切なものは様々な工夫をしなければ目に見えないという意味であると。今見えているものをちょっとした工夫、つまりそこには物語だったり、目に見えているように見えていますが、実は見えるように仕組まれたさまざまな工夫がないと人には伝わっていかない。そんなことかなと思ったりしています。次のお話に繋がるかどうか分かりませんが、そんなことを考えているということをご紹介させていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司会 佐々木先生、ありがとうございました。それでは続きまして、発注者としての立場から早稲田大学の北野様にお話をいただきます。北野様、よろしくお願いたします。

北野 ただ今、紹介頂きました早稲田大学の北野です。早稲田のキャンパス整備という題名を付けておりますが、私からは大学の発注者としての立場、視点でお話をさせて頂ければと思います。早稲田大学はこの早稲田の地で137年の歴史があるのですが、今後も本学が持続性のあるキャンパス整備を目指して、どのようなことを考えているのか、その一端をお話しできればと思っています。

まず一つ目はキャンパス整備の方針として、今大学で明文化している指針、方針というものを二つほど紹介したいと思います。それから、二つ目としては、持続性のあるキャンパス整備を目指してどのようなことをやっていくのかというところで、早稲田アリーナを含めて四つの事例を通して、ご紹介できればと思っています。

まずこちらが1997年ですので、20年以上前に作ったキャ



北野寧彦氏

1971年神奈川県生まれ / 1995年早稲田大学理工学部建築学科卒業 / 1995年間組 / 2004年早稲田大学 / 現在、早稲田大学総長室社会連携企画担当課長 兼キャンパス企画部調査役

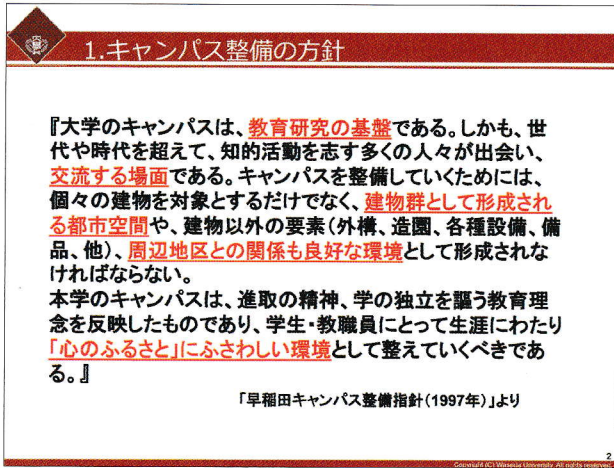


図 8

ンパス整備指針の骨子に当たる部分です。(図 8) 赤字になっている、教育研究の基盤、交流する場面、建物群として形成される都市空間、周辺地区との関係も良好な環境、そして、最後に心のふるさとにふさわしい環境、こういったところがキーワードとなっているのですが、今も変わらずキャンパスの整備方針の骨子として考えています。

それから、これは大学が 2032 年にあるべき姿をめざし、現在掲げている中長期計画、Waseda Vision 150 と言いますが、この中でキャンパスの整備についての目標を示したものです。(図 9) 本日お話しする内容は、この赤字になっている部分、早稲田を取り囲む様々な人々の交流の場、早稲田文化の発展、それから周辺地域・行政との連携といったところがキーワードになっています。

それでは一つ目の事例として、まず早稲田アリーナです。先ほど佐々木先生が触れられた通り、それまでは記念会堂という 1957 年に竣工した建物が、それ以前は記念会堂の場所には陸上競技場がありました。近年、早稲田のスポーツ施設は、この早稲田の地から遠隔地のキャンパスに移転という流れがある中で、早稲田の地に残る貴重なスポーツ施設であるとともに、入学式、卒業式という式典を行う場でもありました。とすると、経済合理性を考え、この様な大規模なスポーツ施設、あるいは式典の場をそもそも大学が持つ必要がないのではないかととなります。従いまして、この建物の場所にもう少し建築面積の小さい建物を建てることも選択肢の中にはあったのですが、キャンパスの持つ歴史や記憶の継承といったことも考え、この従前の機能は維持する計画としました。

これはキャンパスを俯瞰したもので、記念会堂がここにあります。(図 10) キャンパスのかなり大きな面積を記念会堂が占めていまして、だいたい敷地の 12% くらいですが、そのために空地が乏しいキャンパスでありました。また、先ほど触れましたとおり、建物用途は式典と部活動などのためのスポーツ施設でしたので、大部分の学生にとってみれば、普段は使わない建物でした。従いまして、大部分の学生にとってみれば、ここにある、存在している姿あるいはフォルムといったものが記憶の中にある、それが記念会堂であったと思います。

また、このキャンパスはちょうど奥まったところが教育研

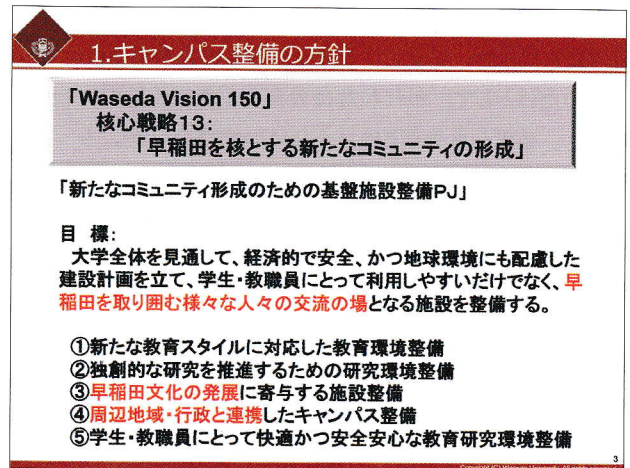


図 9

究の機能、記念会堂が体育館、そしてこちらが学生会館という学生サークルの活動拠点なのですが、この三つの機能が完全に分断されているようなキャンパスでした。このようなキャンパスの課題を解消しようとしてつくられたのが早稲田アリーナで、このキャンパスを利用する全ての人が利用できる施設となる「戸山の丘」、そこに面したラーニングコモンズとカフェ、一般学生が運動できる施設、スポーツミュージアムといったような施設を従前のアリーナ機能に加えました。さらに、先ほど触れましたキャンパスの機能が分断していたところを屋内通路で繋ぐこと、なおかつ単なる回遊動線や廊下というものではなく、その結節点にラーニングコモンズとカフェという人が集まるような施設をつくることによって有機的にキャンパス内を繋げていこうと考えました。

一方で、大学キャンパスを整備するうえでは、周辺地域との共存というところが大事だと考えています。赤色で囲まれた部分が早稲田アリーナのある戸山キャンパス、黄色く囲まれているところが、その周辺の本学のキャンパスや校地として、ご覧のとおり、都市全体の中では非常に大きな面積を占め、かつ非常に緑豊かなところ、あるいは緑の結節点といったところに存在しています。このことから、都市景観ということ考えると、緑の維持や良好な景観を形成していくことはキャンパス整備について大事なことと考えていますが、それだけで十分ではないとも考えています。

そのような観点から早稲田アリーナに設けた施設は、先ほど紹介しました、戸山の丘、カフェやスポーツミュージアムという施設です。もともとこの戸山キャンパスは、ここに正門があるのですが、休日になると門を閉じてしまって、一般の方は全く入れないようなキャンパスでした。今回のアリーナが出来たことをきっかけに休日も門を開いた状態とすることで、普段はもちろん、休日であっても、周辺地域や校友の皆さんが自由に出入りし、公園のように利用できる、まちと繋がるようなキャンパスを実現したいと考えて整備したものです。

次の事例は、少し戸山から離れまして、敷地としては一番大きな、もともと歴史のある早稲田キャンパスです。(図 11) こちらでのキャンパス内とキャンパス外での取り組みを少しご紹介したいと思います。まずキャンパス内の取り組みです。先ほどのまちと繋がるキャンパスというところにも通じるので



図 10



図 11

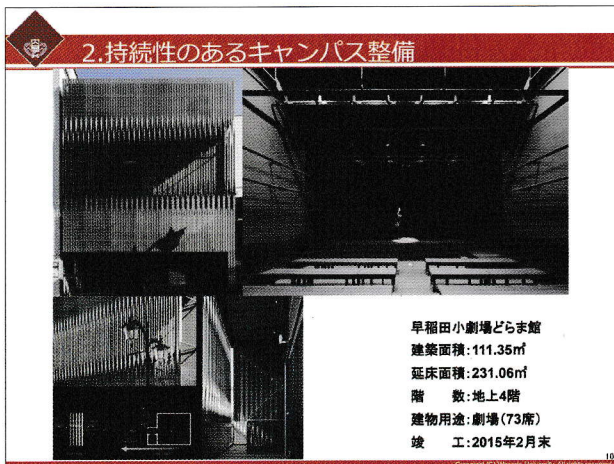


図 12



図 13

すが、近年、キャンパス内にライブラリーやミュージアムを整備することを進めています。演劇博物館は、90年以上前となる1928年に開館したもっとも歴史のある博物館です。この下にある会津八一記念博物館、こちらは1998年ですので、20年以上前に整備したミュージアムです。この二つの歴史あるミュージアムに加えて昨年、早稲田大学の過去、現在、そして未来といったものを展示できる早稲田大学歴史館というミュージアムをつくりました。そして現在、取り組んでいるのが、国際文学の研究拠点ともなる村上春樹ライブラリーです。

当然、大学にあるミュージアムですので、研究が主目的ではあるのですが、別の目的としては、大学が持つ知を社会に還元することで様々な方々が訪れたいくなるキャンパスをつくりたい、あるいは、早稲田大学の文化を外に発信していきたいというようなことから、このような取り組みを進めています。

一方、早稲田アリーナや今の話はキャンパス内の整備ですが、本学ではキャンパス内だけが整備されれば、持続性のあるキャンパス整備として十分とは考えておりません。キャンパス外、つまりは周辺の街が活性化することも、早稲田大学のキャンパスの持続性ある整備に繋がるのではないかと考えておきまして、キャンパス外の取り組みを二つほど紹介したいと思います。

こちらは南門商店街の中ほどにある早稲田小劇場どらま館という建物です。(図12) この施設は、演劇を志す学生が演劇を公演するために準備や練習をして、そして公演を行う、

全部で73席の小劇場です。このように商店街の真ん中にあるのですが、このような商店街の中で学生が活動することで、商店街の賑わいを創出したいということと、学生が社会と繋がる場所で演劇、公演を行うことで、社会教育の場としても活用できていると考えています。

それからもう一つの事例として、大隈通り商店街の中ほどにある大隈スクエアという施設です。(図13) この施設は中間層を大学の関連会社のオフィス、上層部を女子学生向けのワンルームマンション、それから低層部については飲食店が入る複合ビルです。この取り組みは学生が行かないため衰退してきた商店街の活性化を目的に、また大学が休みの期間に入ってしまうと学生がいなくなり、ほとんど人が通らない商店街の中の滞在人口を少しでも増やそう、という考えで始めた事業です。

実際のところは、滞在人口を増やすということ以上に、テナントとしてはグッドモーニングカフェさんが入っているのですが、ランチ時には学生も行くのですが、それ以上に周辺で働いている方々、あるいは周辺にお住まいの方々がランチやお茶をしに来るなど、ささやかですが商店街に賑わいをもたらすことに貢献できています。またそれだけではなく、商店街の飲食店は学生対象で営業しているところがほとんどですが、実は学生以外の需要もあるのだということを商店街の皆さまにも、改めて認識して頂いたという好例だと思っています。

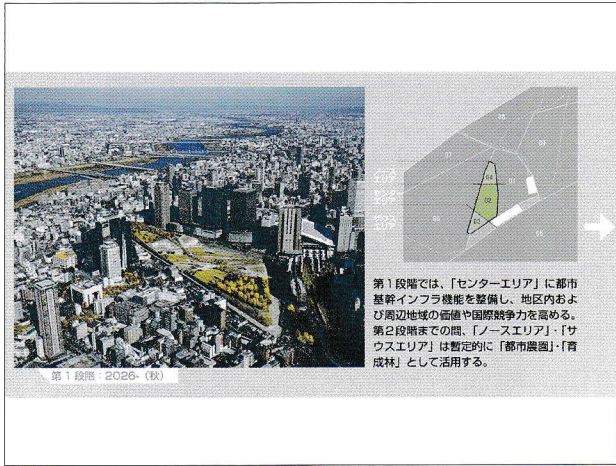


図 14

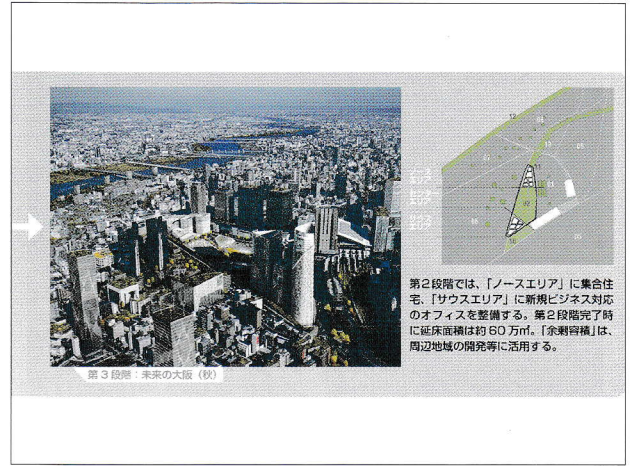


図 15



図 16

最後になりますが、周辺地域の活性化は大学キャンパス、早稲田大学にとっては重要なことだと思っています。本日はキャンパス外での取り組みを二つほどご紹介しましたが、そのような点の取り組みを線に、さらに面に拡げていくということを考えてはいるのですが、大学だけの取り組みではなかなか進んでいかないと思います。ですので、今後は周辺地域の方々、あるいは行政の皆さんと一緒に持続性のあるまちづくりができればと考えています。

将来的には、大学キャンパス周辺の活性化された商店街では学生がさまざまな活動を行い、また地域にお住まいの方々は暮らしやすく、かつ働きやすく、さらにそこに早稲田大学のキャンパスがあるという魅力的なユニバーシティタウンをつくりたいと本学では考えています。ご清聴ありがとうございました。(拍手)



水越英一郎氏

1970年千葉県生まれ／1993年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1995年早稲田大学大学院修士課程修了／1995年山ト設計／現在、山下設計設計本部部长

司会 北野様、ありがとうございました。続きまして、建築設計者の立場から山下設計の水越様にお話をいただきたいと思っています。水越様、よろしくお願いたします。



図 17

水越 改めまして水越です。私からは今回のテーマを少し大きい視点で考えてみようと思います。タイトルは「一つの建築にできること」としました。これは東京を空から見た写真です。東京は総体として見るとこのような感じですが、改めて考えてみると、ここには多くの土地が存在し、それぞれが所有区分というか、様々な権利に分かれている訳です。本来、地球とか地球上の表面は私たちの共有物だったはずなのに、いつの間にか経済の道具になって、所有権という権利で分割されてしまっていると言える良いでしょうか…。こういった状況にある建築や都市の持続性を高めようということを考えていくと、これらは持ち主がすべて異なる訳ですから、どういふふうに旗を振っていけばいいのか、非常に難しい問題だと思います。だから今日考えなければいけない問題というのは、そういうものを乗り越えて、時代性の中で皆さんがどういふ価値観を共有しながら未来に向けて活動していくのか、そんなことを考えられれば良いと思っています。

これは当たり前の話ですが、一般に建築のプロジェクトにはクライアントが存在して、決められた土地の中にクライアントから要求されたものをつくるということが前提になっています。クライアントは個々に価値観をお持ちですので、私たちが提案する価値観に共鳴してくれないケースも多々あって、プロジェクトが必ずしも思った方向に行かないこともあります。

例えばテナントビルや商業施設の場合は、建物自体が商



図 18



図 20

品という側面を持っていますので、短期的な経済効果の少ないアイデアは理解してもらうのが非常に苦しい。こういった経験をされた方もたくさんいらっしゃると思います。むしろテナントビルや商業施設の場合は、短期的な経済効果が高いアイデアしか要らないと思われるケースなどもあると思います。その一方で、私自身は、建築設計や都市計画に携わる人達には未来に向けて新しい価値を見いだす職能とか、社会を動かしていくような職能も期待されているのではないかと感じています。

時代の変化の速度は速くて、社会全体の価値観が刻々と変わっていると思います。ですから、10年前の価値観と今の価値観は違いますし、例えば短期的な価値ばかりに着目した建物を作ってしまうと、10年後、20年後には時代に対応できていない、もしくは非常に時代のニーズとずれたものになる可能性があります。

また、地球上はそれぞれの国や地域が定めた社会制度というルールで秩序を保っている訳ですが、そのルールも必要最低限のものが定められているだけで、その制度も時代の運用によって変わってしまうことがあります。日本ではこれが当たり前だと思っていることが、海外に行くとき全く違う。例えば、喫煙のルールもそうだと思います。日本では喫煙室という部屋の中に入って吸うことが一般的ですが、海外では外で吸うことが一般的です。ですから、来年のオリンピックではかなり混乱すると思います。ヨーロッパの方は外で普通に



図 19



図 21

たばこを吸っていたりしますから、そういう常識というのも実は国によって大きく異なります。では、そういう中で、どのようにそれぞれの物事を捉えていけば良いのかというのがポイントになると思っています。

ここからは少し事例を紹介します。最初に紹介するのは、数年前に私たちの事務所とオランダの UNStudio が一緒に取り組んだ大阪駅の北側のうめきた 2 期地区のアイデアコンペです。(図 14・15) このコンペの特徴は、敷地の中だけでなく、敷地であるうめきた 2 期地区を中心に周辺 2 キロのまちづくり全体を考えて、それらを最適化するような計画案や運用プログラムを提案して欲しいというものでした。しかも、法規も現行法規にとらわれずに、新しいまちづくりの仕組みを提案して良いというものでした。私達はその面白さに惹かれて、参加することにした訳ですが、いざコンペを始めてみると意外にも、この自由度が私達を困らせることになりました。普段、知らず知らずのうちに敷地や法規の枠組みの中で考える癖が身につっていて、周辺 2 キロの地域全体の持続性を高めていくということはどういうことなのか、都市を使いながら更新していくということはどういうことなのかなどといった根本的な課題に直面したり、それを適切に運用するシステムを考えることがとても難しいということが分かりました。

結果的に、ここでは最初に敷地内に大きな緑地を確保して地域全体の緑量を増やした後に、段階的にその緑地を周辺の敷地と等価交換する形で緑地を周辺に分配しながら、容

積を交換するようなアイデアを考えました。ここでは都市のアイデンティティや生物多様性、産業の成長、不動産価値をグラフ化して、段階的に整備することで緑量も担保しながら全体のポテンシャルを上げていくようなアイデアを提案しました。

このようなコンペに参加してみると、色々なアイデアは出る一方で、現実目を見ると、実際には各々の土地には敷地の所有者がいるので、経済の仕組みが上手くいかないと、結局は誰も合意してくれないのではないかとといった不安も感じました。

次に紹介するのは、私どもの事務所が最近手掛けた中国に建つ2つの病院です。(図16) 中国の場合は土地の所有が国家になっていますので、病院をつくることを国が決めれば、敷地や敷地周辺には新たな土地区画を計画することが可能です。この写真でも敷地だけでなく、周囲がすべて建設現場になっています。この病院が30万平方メートルありますが、この廻りにも200メートルクラスの庁舎がバンバン建っていくという感じで、国が土地を所有している都合上、行政方針が打ち出されれば、今まであった街を一旦リセットして、全部新しくすることができてしまう。こちらは上海で手掛けた病院ですが、こちら先ほどと同じように、今までの街並みとは関係なく、街全体をゼロからつくってしまう。これが中国での常識です。このやり方には驚きました。

上海に行かれた方は皆さん、ご存じかもしれませんが、今、上海といえば世界を代表する経済都市の一つで、表向き非常に経済成長しているように見えますが、道路1本挟むと、こういった貧しい地域などもあって、これも結構ショッキングでした。(図17)

ここで感じたのは、私たちが今常識だと思っていること自体が、社会や国家が生み出した偶像みたいなもので、ある日突然、前日まで善しとされていたものも、NGになる可能性があるのではないかとということです。このように海外のプロジェクトに携わってみると、日本の常識と海外の常識の違いを痛感します。

このようなことを踏まえうえて、都市・建築の持続性を高めるとはどういうことなのか改めて考えてみたいと思います。都市再生の事例として有名なのがグッゲンハイム・ビルバオです。これはフランク・ゲーリーが手掛けたものですが、あまり産業などもなかった地域にグッゲンハイム美術館をつくって、たくさんの観光客を呼ぶ。これは街に新しいシンボル、つまり特異点をつくるというやり方で、どちらかという対比型のものづくり方だと思えます。

このような街おこしの方法もあるとは思いますが、世界中でみんながこれをやり始めてしまうと、結局、世界全体が均質化してきてしまうので、これは非常に才能に優れたごく一部の建築家がこの手法をとれば良いのではないかと。もしくはこういう場所がいくつかあるのは良いけれども、これは世界全体に通用する手法ではないと思いますので、私のような凡人的な建築家は自然の摂理のように、普遍性の高い原理原則やそれぞれの土地が持つ地形や文化などの固有性をその

土地の資産と捉えて、それを引き出すような建築をつくるのが都市や建築の持続性を高めることに繋がるのではないかと考えています。

ここからは、早稲田アリーナの話をしたいと思います。早稲田アリーナは、今お話したような考え方が割と反映できた作品になっているのではないかと思います。最初に設計の体制ですが、このプロジェクトは基本計画と基本設計を山下設計が行い、実施設計と監理を山下設計・清水建設設計共同企業体で行っています。後ほどご登壇いただく清水建設の笠原さんとは実施設計段階から協働しています。ランドスケープデザインは、基本設計段階からプレイスメディアに参画して頂きました。

早稲田アリーナは多機能型スポーツアリーナを中心にラーニングcommonsなどを内包する複合施設となっています。その最大の特徴は施設ボリュームの大半を地下に埋設することによって、地上部に新たな交流活動スペースをつくっていますが、先ほど北野課長からもお話があったように、地域にも開かれたスペースになっていて、大学の中だけのオープンスペースではなく、地域全体のパブリックスペースになっているのが特徴です。(図18)

これは前身となる記念会堂です。この施設は早稲田大学では大隈講堂に次ぐシンボリックな性格を持つ施設になっておりましたので、この建て替えにあたっては、新しいシンボル性をどう考えるのかというのが一つのテーマになりました。こちらは建て替え前のキャンパスの様子です。ここに記念会堂が建っていますが、非常に狭隘過密な環境で、学生の活動スペースが不足していたり、敷地の中に高低差がありましたので、上の段の校舎と記念会堂の活動が分断されてしまっているといった課題を抱えていました。

このプロジェクトで大学から要求された設計条件は大きく三つありまして、狭隘過密なキャンパス環境の改善、教育研究環境の拡充、言い換えると記念会堂よりも大きな規模の多機能型アリーナをつくりたいということです。それからシンボル性の継承ということです。この三つの中で私たちが一番悩んだのは、シンボル性の継承です。

そもそも現代におけるシンボル性は何なのか。特に建築でいうと表層的なデザインとか形態なのかと考えがちですが、どうもそれは違うのではないかと考えていて、先ほど冒頭の解説でもお話ししましたが、今世界では持続可能な開発の仕方や、それを実現するための方策を考えようという大きな流れがあるように思いますが、実は大学を取り巻く環境を見てみると、それとよく似た状態があります。例えば、持続可能な地域をつくっていくためには、地域社会との連携をもっと強化していかなければいけないという課題があったり、優れた研究成果や人材を輩出するために知的生産性を高める必要があったり、さらには環境負荷の削減、ユニバーサルデザインの推進、男女共同参画、LGBT対応など、様々な分野における多くの課題があって、これを同時に解決することが求められています。

そこで、私たちはこのプロジェクトにおけるシンボル性を大

学やキャンパス、さらには地域社会が抱えるさまざまな課題を一気に解決するような新たな建築モデルを模索することによって、早稲田大学の未来のビジョンを表出することが大事なのではないか。そして、そのビジョンを体験できるような環境や風景を生み出して、それらを体験できる場所をつくるのが、次世代のシンボルにふさわしいのではないかと考えました。つまり、学生に「大学はこういうビジョンを持っています」と言葉で言ったところでなかなか伝わらないので、そういったビジョンを体験できる場所をつくるのが、新たなシンボルにふさわしいのではないかと考えたのです。

こういったことを実現するために、さまざまにリサーチをしました。こちらは地形のリサーチです。こちらが敷地ですが、この敷地は現在の西新宿の高層ビル群から神田川を繋ぐ大きな河道、川の道がありまして、その水の流れの上に立っていることが分かりました。それから周辺を見てみると、穴八幡宮とか放生寺、旧尾張藩の下屋敷の跡地である戸山公園とか、さらには村野藤吾先生の校舎群など、今も歴史の資産が残っていて、これらをどういうふうに扱えばいいかなどについても考えました。

さらに広域的に見てみると、この敷地は神田川流域に位置していて、東京西部の武蔵野の地域と都心を繋ぐエコロジカルネットワークの中継点になっていることが分かります。椿山荘を起点に大隈庭園、そして早稲田キャンパスがあって、この先に戸山公園と緑が連続しており、この場所はその間に位置する重要な場所だということが分かる訳です。

さらにキャンパスの中に目を向けると、先ほどお話したように、オープンスペースが足りないとか、活動が分断されているとか、村野藤吾先生がつくられたキャンパスの骨格がうまく継承されていないのではないかと、多くの課題を感じました。

このようなことを考えて、結果的には建物の大半を地下に埋設することによって、地下にこれまでよりも大きなアリーナを確保することで、教育・研究環境の拡充を図りながら、その地表面に第二の大地としての新しい交流・活動スペースをつくらうと考えたわけです。(図 19)

この第二の大地は「戸山の丘」と名付けられています。全体に約1メートルの土厚を持った大地となっています。生物多様性に富んだ環境整備を行うことで、地域の生態系の強化や風景の連続性の確保をしたいと思います。(図 20)

こちらは内部の様子です。地下2階と地下1階には最大収容人員 約6,000人のメインアリーナを配置しました。地下でありながらも自然光が感じられる設計にしています。その上に「戸山の丘」と名付けられた緑豊かな空間があります。上から見ますとこのような形で、1階レベルと2階レベルを「戸山の丘」で繋いで、キャンパス全体の回遊性を高めています。

この「戸山の丘」は平均勾配20分の1のスロープで上下を繋いでいますが、車椅子の方、パラアスリートの方、さらには乳母車を押しているお母さん方も自由に登れるように設計しています。今では天気が良いと、小さいお子さんを連れての方がたくさんいるような風景になっています。「戸山の丘」

の2階レベルはこのような形で、武蔵野の雑木林をモチーフとしたような新しい学生の活動環境をつくらうと考えました。水辺の空間などもありまして、さまざまな活動に対応できる空間としています。

「戸山の丘」の奥に交流テラスと名付けた縁側的な空間、さらにその奥にラーニングコモンズなどを設けていますが、ここでは屋外、縁側空間、屋内というように、学生が自分の活動に合わせて好きな場所を選べるような空間づくりを行っているとともに、施設のどこからでも自然光や緑を感じることができる、バイオフィリックデザインを実践することで、キャンパス全体の知的生産性を高められないかと考えました。(図 21)

この3階にはスポーツミュージアムがあります。これは旧記念会堂の外壁を取り外してつくったレリーフです。大学でするのでOBの方の記憶なども継承しながら次の時代に向かっていくことが大切なのではないかと感じました。

このようなつくり方は、エネルギー面でも大きなメリットを生み出しています。これは現場で測定した外気温と地中熱の温度ですが、地中熱は1年間、ほぼ18℃で安定しています。建物の大半を地下に埋めたうえに屋根部分も約1メートルの土ですので、六面がほぼ18℃の土で覆われているという状態をつくることで、エネルギーを使わなくても安定的な室内環境が確保できる仕組みとなっています。また、設計段階ではアリーナの使われ方を調査しながら、空調や換気の方法等を工夫することで、結果的には削減率61%のZEB Readyの認証を受けていますが、これは1万平米越えの大学校舎としては非常に希少な例の一つです。

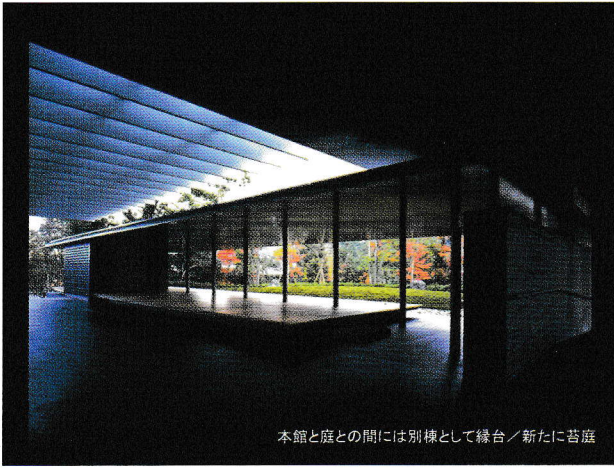
ここまででは私達としてもなかなか良かったのですが、実は竣工後に一つ課題が見えてきました。竣工以来、私達は継続的に運用調査を行っています。この結果は後ほど笠原さんにお話して頂く予定ですが、思ったとおりに運用されていない部分が結構出てきていることが分かってきました。建築の持続性を高めるうえでは、自然エネルギーを有効活用できるシステムや骨格のつくり方も大切なのですが、竣工後の運用も非常に大事になってきていることを実感しています。最近では、皆さんがSDGs等を合言葉のように簡単に使っていますが、これを紐解くのはとても難しく、竣工後の運用までも設計者がきちんとフォローしていかなければいけない時代が来ているのではないかと感じています。以上で私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

司会 水越様、ありがとうございました。続きまして、ランドスケープ設計者の立場からプレイスメディアの吉村様にお



吉村純一氏

1956年鳥根県生まれ／1980年千葉大学園芸学部園芸学科卒業／1980年鈴木昌道造園研究所入所／1990年プレイスメディア設立／2008年多摩美術大学美術学部環境デザイン学科教授



本館と庭との間には別棟として縁台／新たに苔庭

図 22



北国の中心に「床」を仕つらえる

図 24

話をいただきたいと思います。吉村様、よろしくお願ひいたします。

吉村 吉村と申します。よろしくお願ひいたします。われわれランドスケープアーキテクトは、考えてみれば繋いでばかりの職能だと思っています。ちょうど何かと何かの間、基盤の部分はどういうふうにするのかというのが、われわれ常にやっていることだと思っています。今日は五つの仕事を通し、どんな繋ぎ方をわれわれはしてきたのかということをお伝えしたいと思っています。

最初は「歴史を繋ぐ」。これは平等院の鳳翔館の仕事です。平等院の宝物を納めるための鳳翔館、博物館をつくりました。建築は栗生明さんです。ちょうどこれが鳳凰堂です。その南西、少し小高くなっているところにつくばうように、また沈み込むように土地の中に埋め込む。そんな建物になっています。

庭園との接点として、この縁台を栗生さんがデザインしました。(図 22) この縁台によって、一つは遠くの山の景色、それと近くの庭の景色が繋がっていきます。これが引いて見たところ。このように向こうに山が見えていきます。フレーム越しに遠景の山が見えます。一歩近づくと新しくつくられた苔庭、これは昔からあった鐘楼です。よくNHKの大晦日にボンと突かれるのはこの鐘楼の鐘です。北側には直線的な段の重なりの花階が差し込まれています。平等院はフジで有名です。



左手の既存樹林、右手のユリノキの列植によってフレーミング。中景の棚田と遠景の神鍋山地が切り取られ、あっちとこっちが繋がる

図 23



緑をつなぐことを強く意識したエントランス棟、レストラン棟。高さを抑え背後の自然の緑を活かす

図 25

そのフジ棚を縦に伸ばしたようなデザインをここに持ち込みました。ここでも今までなかったようなデザインが持ち込まれています。歴史を繋ぐ。これは宇治川の川霧の写真ですが、1000年前から受け継がれてきた風景、宇治川、そういうところに平等院に新しく造形を差し込むことによって、今と昔が繋がった新しい風景が現れたと考えます。

次は「風景を繋ぐ」。冒険家の植村直己さんという方、大変な著名な方ですが、最近の学生に話をすると、植村直己さんを知らない学生が多いです。その植村直己さんの生まれたのが兵庫県の豊岡市、昔は日高町といって町だったのですが、豊岡市に合併されて日高町、ここで植村直己さんは生まれました。僕は松江で生まれました。松江はとてもいいところなので、来ていただけると松江の人間、自分たちのまちが大好きなので大歓迎いたします。

最初に現場に行ったとき、棚田がすごくきれいだったので。その向こうに見える山々もすごく美しかったです。僕たちはここで何をしようかなと思ったときに、あまりやることがない。ただ、この美しい山並みや棚田を見せることができたなら!という風に考えました。できたのがこれです。棚田はこのあたりになります。既存の樹木と新しく植栽した並木によってフレームがつけられました。(図 23) 遠景に見えるのは神鍋山地、手前の棚田と重ねて、植村さんの原風景を見ることのできる場を提供できたと思います。あっちとこっちを繋ぐ、そんなことを考えました。風景を繋ぐ。そこに何をつくるとい



様々な居場所が用意

図 26



マウンド脇の小さな水たまり

図 27



ハイサイドライトのためにめくり上げられた斜面

図 28

うことではなく、あっちとこっち、どのように繋げばいいかということがテーマなのだと考えています。

次は「まちと繋ぐ」。札幌にある日本生命のビルです。(図24) 札幌の中心部、赤レンガ庁舎と言われる県庁の古い建物です。その前の開発です。イチヨウ並木が見えています。そしてこれが赤レンガ庁舎です。ここにわれわれ何を提示すればいいかと考えました。札幌はすごく魅力的で、北国の様相をたくさん持っているのですが、それを掬い取るようなところを提案したいと考えました。住宅の中に床の間があります。その床の間のような設えができたらいいなと考えました。これが「床」です。

札幌はとても雪が多いところで、札幌の中心部は舗装がヒーティングされています。なので、ヒーティングされていない芝生の上にはきれいな雪だけが残ります。道路端は除雪された汚れた雪しかないのですが、ここにはきれいな雪がある。イチヨウの葉がたまります。北国の宝物のようなものがここに飾られていく。そんな床の間のイメージです。まちと繋ぐ。北国の豊かな表情をすくい上げて、人々とまちを繋ぐ。まちの床の間を提示したつもりです。

次は「緑を繋ぐ」。東急キャピトルタワーをご紹介します。これが国会議事堂、首相官邸で、日枝神社のすぐ横にあるオフィスとホテルが複合されたビルです。これが日枝神社の森です。われわれの仕事はここです。これはレストラン棟になっています。レストラン棟は高さを抑えています。そのこと



木の間越しの「うれしい」風景

図 29

によって日枝神社の後ろの緑の森を見ることができます。(図25) これは昔のホテルの解体のときの写真です。すぐそこが境界でした。これは日枝神社が持っている建物、日枝神社の緑、このあたりも日枝神社の緑があったようです。

とにかく緑を繋げたかったのです。どうしたら繋げられるか。レストラン棟の屋上に植栽できるように基盤を設けました。それから、下のレベルからこちらの高さのところまで繋げるように、段上の植栽基盤をつくりました。ほら、繋がったでしょうというくらい自慢のショットです。これはもう日枝神社です。われわれが植えたのはことここしか、この写真ではないのです。これも日枝神社の緑です。

緑を繋げることによってレベルの解消がなされて、動線でも日枝神社と繋がることができ、一般市民に開放された散策路ができました。鳥も喜んでくれていると思います。これが皇居、ちょうど赤坂御用地のとの間に日枝の緑があって、それにくっつくようにこのキャピトルタワーの緑があります。緑の飛び石として役に立っているのではないかと思います。緑を繋ぐ。既存の緑の資産を生かすこと、そこに今まであったものをどれだけ生かし切るかということがとても大切だなど考えています。そのことによって熟したまちとなっていくのではないかと。

これは何を繋ぐということではなく、「繋ぐ」という題名にしました。繋ぐことが沢山あったからです。早稲田アリーナ、先ほど水越さんのお話にもありましたけれども、われわれは

とにかくここがどんな場所かということを広域的に分析します。これは建築家もランドスケープアーキテクトも同じです。この敷地の周辺には稠密な住宅地の中に大規模な土地利用が存在します。これは早稲田大学の存在も大きく、また、多くの緑は崖線に残された緑という地形からの要請でもあるでしょう。

これは地形の段彩図です。先ほどの話にもありましたが、谷戸の中央にこの早稲田アリーナは位置しています。そのような地形を活かして、昔、尾張藩の下屋敷の日本庭園の池がありました。そんな場所に早稲田アリーナの敷地が位置しているのです。われわれはここからできるランドスケープを展開していきたいと思いました。水の循環、貯留の可視化、地形の傾きによる水の動きを見えるようにしたいということ、次に生物多様性、谷戸の中途にあるので、そこにあるべき自然と、それに関わっていく人の営みが見えるようにしたかったこと。そして3つ目は、先ほども話がありましたキャンパス内の多様性です。キャンパス全体の回遊性を高める、そんなランドスケープができればいいなと考えました。

建築を埋めることによって、新しく生まれたパブリックスペースです。これはスロープ、これはハイサイドライトのため持ち上げられた建築の屋根部分です。色々な使い方をされているので、とても僕としては嬉しいです。先ほども話がありました、5%のスロープ。普通スロープを付けても、みんなそこを通ってくれないことが多く、もちろん階段の方が早く行けるのですが、どうもここはそうではなく、山道を歩くように、みんなここを通ってくれています。ベビーカーを押したお母さん、それから学生たちもここを通ってくれます。

スロープを上がると、上の部分はさまざまな場所が用意されています。(図26) めくり上げられた床を使って、マウンドを使って、ベンチのような座るための装置を使って。先ほどのお母さんと子どもです。こんな風景も!ここで彼らは映画を見ていました。それから、これは大学の先生なのか、近くにいらしたビジネスマンか分からないですが、メールをチェックしていたのか。トランプを始める学生たちもいました。

スロープにはいろいろなものを植えてあります。混植、色々なものを混ぜて植えました。キキョウ、カワラナデシコ、いろいろな種類が植えられています。マウンドの脇には小さな水たまりが用意されています。(図27) このマウンドに降った水はここに溜まってきます。向こう側に降ったものも、このフンカゴを通じながら、こっちに回ってくるような仕掛けになっています。水たまりにはショウブとかスイレンのような水生の植物が植栽されています。水を溜め始めたときに、すぐシオカラトンボが飛んできていました。どこで聞いたのか分からないけれども、水を溜め始めると飛んできていました。小さくて見えないと思いますが、メダカがいます。メダカは飛んではこないのですが、どうしたのかなど。これを一緒につくってくれた職人さんが、この水たまりにはメダカがよく似合いそうだということで、放してもいいですか。やってみようということで放したメダカです。今日見たら金魚も泳いでいました。どんどんいろいろなものが放り込まれるのではないかと

ちょっと心配ではあります。

ラーニングcommons、天井の部分が緑色っぽくなっています。外の緑を拾って緑色の空気をもったラーニングcommonsになっています。ハイサイドライトのためにめくり上がったところに、座るのための場所が用意されています。(図28) マウンドには色々な勾配があります。グループで溜まるような場所、それからコンクリートのベンチのようなものに座り、その前の少し急になったマウンドに腰掛ける学生たち、とてもうれしい風景です。こういう風景を見たかったんです。(図29)

「繋ぐ」。「緑を繋ぐ」。地域環境の骨格を強化するという意味で、すごく役に立っているプロジェクトだと思います。「地面を繋ぐ」。これは先ほど水越さんの話にもありましたが、キャンパスの高低差を繋いで回遊性を高める。「人と人を繋ぐ」。これは今コンピュータの中で色々なことができるようになっていて、大学に来なくてもいいような時代だと思います。でも、学生たちに大学に行ってみようという気にさせてあげられるような場所ができたのかなと思います。大学で友達と会って、直に話す、出会う。それと「人と自然を繋ぐ」。土の匂いか花の匂い、木の匂い。昆虫もいました。魚もいました。風や日の光や木陰や雨、そういうものが全部ここに盛り込まれて、気持ちの良い場所ができたのではないかと考えています。今、五つの繋ぐということを紹介しましたが、やはり異なっていることを認めて、それを共有しながら手を取り合う。握手する。そういうことが繋ぐということではないかと。

SDGsの17の目標は非常に多岐に渡っていて、色々なところでどうすればいいのか、分からないようなことなのだけでも、結局は手を取り合って、握手することで溶けていくのではないかと。ランドスケープアーキテクトは気楽に考えています。以上で終わります。(拍手)

司会 吉村様、ありがとうございました。講演としては最後のパートになりますが、機械設備設計者の立場から清水建設の笠原様にお話を頂きたいと思います。笠原様、どうぞよろしくお願いいたします。

笠原 清水建設の笠原です。よろしく願いいたします。私からは本日のテーマを建築設備の立場で考えていきたいと思えます。こちらがSDGsの項目と建設手法の例を並べてみました。(図30) 地球環境に配慮したサステナブルな社会、健康、快適に暮らすインクルーシブな社会、安全、安全でレジリエントな社会を成立させるために必要な手法だと考えています。

この中で特に建築設備に関わる者としては、健康な室内環境の創出や雨水利用などの水資源の利用、再生可能エネ



笠原真紀子氏

1967年新潟県生まれ/1990年早稲田大学工学部建築学科卒業/1990年清水建設/現在、清水建設設計本部 設備設計部4部グループ長

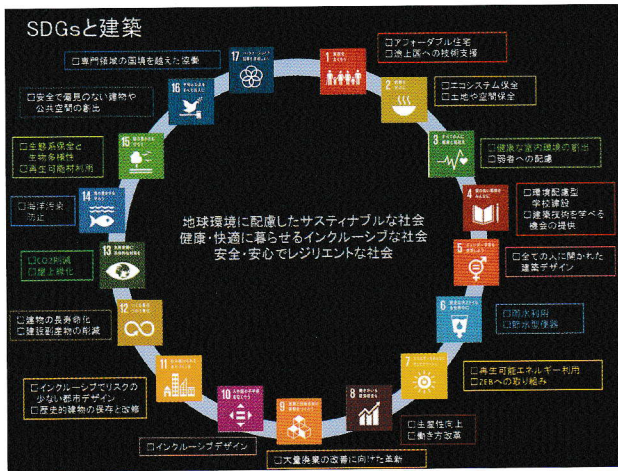


図 30

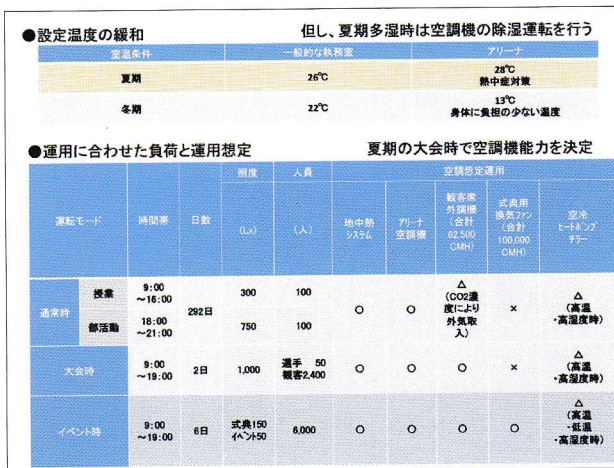


図 32

ルギー利用や ZEB への取り組み、屋上緑化や生物多様性などのキーワードがあるかと思ひます。キーワードの一つである ZEB ですが、こちらが一般的に ZEB を達成するための省エネルギー手法の例になります。左側が省エネルギー計算プログラムで計算できる省エネルギー手法、右側がそれ以外の省エネルギー、省資源手法になります。建築の高断熱化や空調、照明などといった省エネルギー手法を用いて ZEB を達成することを目指すことが、今後多くなっていくかと思ひます。

環境設備として、深く関わる内容である地球環境に配慮したサステナブルな社会の実現に向けて、早稲田アリーナを例にしてご紹介したいと思ひます。早稲田アリーナの基本理念としては、空調設備に頼らなくても快適な環境が維持できることを掲げ、ZEB Ready の達成、ゼロエネルギーアリーナの実現を目標としました。そのため自然のメカニズムを尊重し、計画特性や運用特性を生かした建築設備計画を立案しました。

これから設備計画について詳しくご説明したいと思ひます。こちらが今回施設の概念図になります。(図 31) 建物の空調負荷には外部負荷、内部発熱、外気負荷などがありますが、今回の早稲田アリーナは地中に埋設されていることから、外気負荷は非常に小さいものとなっています。さらに屋上緑化によって屋根からの日射熱を削減することによって外部負荷

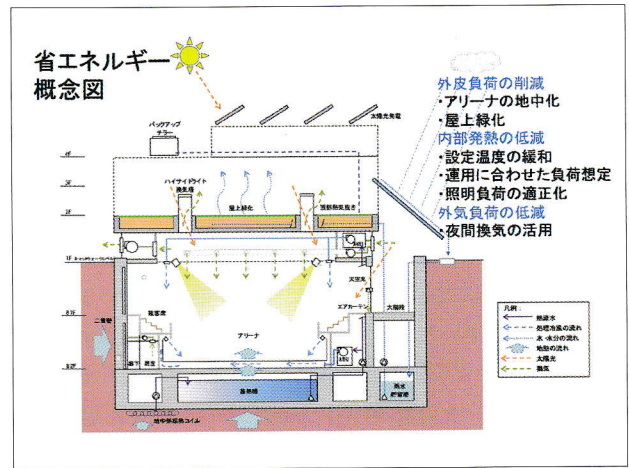


図 31

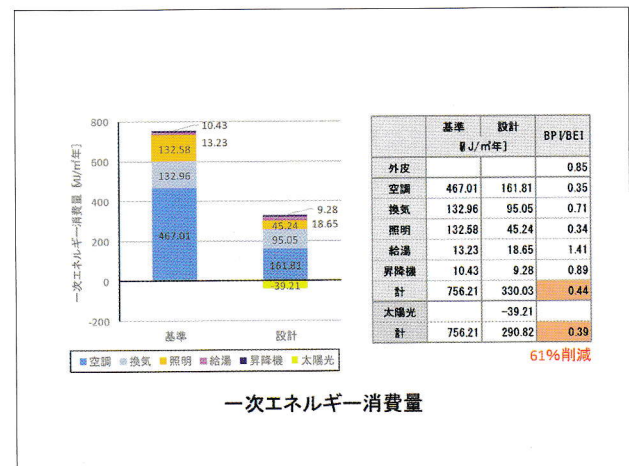


図 33

を非常に小さくすることができました。さらにこの地中に埋設されているということの恩恵を受けるため、あえて地中側の外壁は断熱を設けず、直接、地中熱を取り込めるような構造としています。

内部発熱の低減としては設定温度の緩和、運用に合わせた負荷想定、照明負荷の適正化を行っています。また外気負荷の低減としては、日中は CO2 濃度が上がらない限り換気を行わず、極力涼しい夜間換気を活用することで、室内の環境を維持する計画としました。設備システムとしては、地中に埋設されている特性を生かし、地中熱を取得するコイルを埋設し、地中熱を使ってアリーナの空調をするという計画を行いました。

設定温度の緩和に関しては、学校施設であることからアリーナの夏期においては 28℃、冬期においては 13℃の設定としています。また、室内の使われ方について大学側と初期の段階で協議を行いました。(図 32) その結果、通常時の授業や部活動で使われる日がほとんど多いこと、また大会やイベント時においても、イベントの式典は入学式や卒業式を指しますが、こちらが中間期に実施されることから設備の能力としては夏季の大会を基準にして空調機能力を決定しています。通常の使われ方においては、先ほど説明した地中熱システムをベースに、高温多湿のときだけ空冷ヒートポンプチラーからの冷水を送るというシステムとしています。また

CO2 濃度が上がった場合のみ観客席の外調機を運転させて換気を行います。照度に関しては、授業では 300 ルクス、部活動では 750 ルクスといった想定で設計を行いました。地中に埋設されている特徴を生かした設計により BELS の認証を受けて、BEI は 0.44 ということで、ZEB Ready を達成しています。(図 33)

本格運用して半年間、設計者として設計した意図通りの室内環境や運用になっていることについて確認を行いましたので、その報告をいたします。こちらが先ほど水越さんのスライドにもあったような運用状態のヒートマップになります。一番左側がアリーナの温度、中央がアリーナの相対湿度、右側が照度になります。まず左側のアリーナの室内温度に関しては、4月、5月の中間期は地中熱の恩恵を受けて18～20℃と安定した状態となっていました。6月の梅雨以降はだんだんと温度が上がり始めまして、夏期の状態で26～27℃くらいの状態になっています。また、総体湿度も梅雨のときから上がり始めて、また初年度だったこともありまして、コンクリートから発生する湿度で相対湿度が若干高めの状態になっていました。

一番右側のアリーナの照度というところに注目していただければと思います。設計の段階の状態と想定と一番異なって運用されていたのが照度になります。こちらは水色が300ルクス、緑色が500ルクス、黄色が750ルクス、オレンジ色が1,000ルクスになっています。こちらの表を見ていただきますと、部活動で想定していたのは300ルクスですが、ほとんどが1,000ルクスでの運用となっていました。一方、部活動の時間帯は750ルクスを想定していましたが、500ルクスで運用されているということが分かりました。こちらは1,000ルクスでの運用に関しては公式試合を想定していましたが、よりよい環境で授業を提供したい。学生にそういう形の環境で授業をしたいという先生の思いがありまして、このような運用になっています。

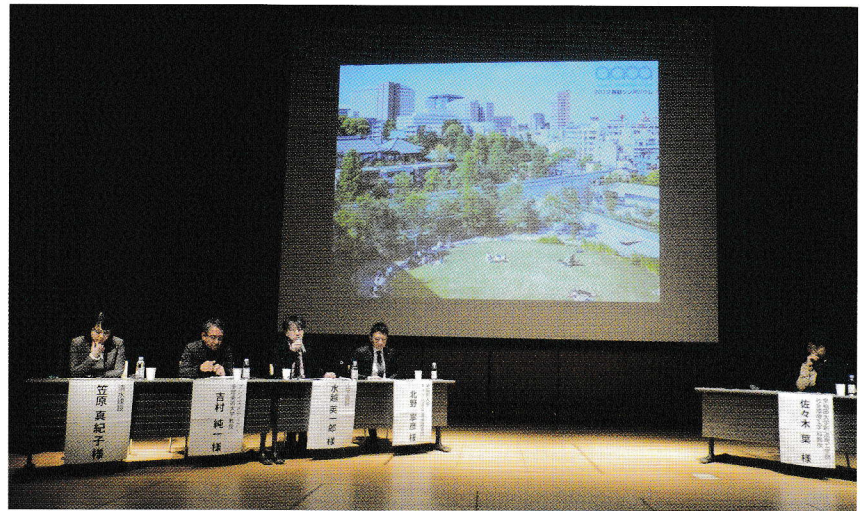
これらを踏まえて早稲田アリーナにおけるサステナブルな社会の実現に向けての課題とポイントがこの半年間で見えてきました。まず設計段階のアリーナはJIS基準で300ルクスでしたが、実際には1,000ルクスで運用されていました。公式試合が行えるという高い仕様になっていることから、より良い教育環境を学生に提供しようという先生の思いと、またその環境を学生が望むことにより、アリーナの照度が1,000ルクスで運用されている時期がありました。この使い方をどうするかということについて、現在、大学とも協議を行っておりますし、今後も学生にとってより良い環境にするためにどうすればいいかということについて考えていく必要があるのではないかと考えています。

また設計時点での考えを長期間引き継いでいただくためのフォロー体制の確立や、施設管理者が方程式を持つ仕組みづくりも必要だと考えています。早稲田アリーナは上半期の環境と運用状態をもとに大学と協議を行っています。今回、早稲田アリーナを例としてこの報告をさせていただきましたが、環境に携わる者としては省エネルギーの観点からサステ

ナブルの社会の実現に向けて、竣工後のフォローやアフターサービスなどにも設計者が関わるべきではないかと考えています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会 笠原様、どうもありがとうございました。以上で、第1部の講演を終了させていただきたいと思います。それではここで休憩に入りたいと思います。



パネルディスカッション

パネルディスカッション

司会 それでは、ただ今より第2部のパネルディスカッションを始めたいと思います。ここからはコメンテーターの佐々木先生に司会進行をお願いしたいと思います。佐々木様、よろしく願いいたします。

佐々木 では、議論の時間に移りたいと思います。ひと渡り4名の方、私を入れると5名ですが、少しプレゼンテーションをしてもらったわけですが、こちらの4名の方はずっとチームで長いこと早稲田アーナの仕事をされていたので、お互いが何を考えているかをよくご存じであったかもしれませんが、改めて今日のプレゼンテーションを聞きながら、まず最初に、この話は面白かったとか、ここに触発されてこんなことを考えたというようなところから話を始めていきたいと思えます。どなたからでもいいですが、いかがでしょうか。

吉村 佐々木先生の、大切なものは目に見えない。大切なものはさまざまな工夫をしなければ目に見えない。確かにそうだなと思います。すごくきれいな水がとうとうと流れているところがあって、その流れの水の量とか、とうとうというのを客観することは、見ているだけではできない。そこに竿を突き刺したら、水が盛り上がり手には水の重さみたいなものを感じることができる。そういう所作、工夫みたいなところが、僕たちランドスケープアーキテクトにすごく求められているなと思って、佐々木先生の先ほどの話、とても共感しました。

佐々木 一言ずつ。

水越 私も佐々木先生のお話になってしまうのですが、意外だったのは、「私」という主体が公共性を持った建築をつくる中で非常に大事だということを一見分かってそうなのですが、僕らは建築をやるときに、「私が」とか、「あなたが」という言葉はなかなか使わないんですね。それは大学を相手にしたり、企業を相手にする場合に、「私が」というあまり強い個人は出してはいけないのではないかとどこかで思っている節があります。

でも、言われてみると、結果的にはパブリックというのは

「私」や「あなた」の集合でなくてはならないし、意識を高めるというのはそういうことだと思いますが、どうも建築をやるときに、意識的にその部分を回避している部分もあるのかなと思っていて、僕らの説明の中ではなかなか使わない言葉ですね。今後は、もっと「私」というキーワードが入ってくる方が、さきほど話題に挙げたSNSではないですが、みんな個人の趣味がすごく多様になってきて、しかも自分が好きな写真をアップするというものの集合体みたいなものがいっぱい出てくるじゃないですか。ツイッターとかインスタグラムもそうですが、それが世界に発信されていくという情報の発信の仕方と、さっき佐々木先生がお話しされた都市の捉え方というのは、これからの一つの道筋になるのかなと思って聞いていました。

北野 私からは二つほど。まず一つは佐々木先生の話ですが、私も佐々木先生のおっしゃった中では、やはり風景的思考というところで、多くのレイヤーをデザインする、あるいは異なる視点のデザインという表現が使われていたと思いますが、大学というのは安易に限られた人間の集まりみたいな感じに捉えられるのですが、実は非常に多くのレイヤー、異なる視点が入っていて、そこをどのようにしていこうということを決めるときに非常に難しいなという風に普段感じていますので、そこに非常に共感しました。

もう一つは吉村先生の、緑を、歴史を、風景を繋ぐという中で、最後に人と人とを繋ぐというキーワードがあって、まさに私が本日お伝えしたかったところはどちらかというと、人と人の交流する場としての整備でした。それは、本学がキャンパス整備の中で力を入れて取り組んでいる目的の一つですが、ランドスケープデザインの中でも意識され、そして人が実際に使われているところを見てうれしく感じるということに非常に共感しました。

笠原 私も佐々木先生のところで、どれだけ多くのレイヤーをデザインのテーブルに乗せられるか。どれだけ異なる視点をデザインのプロセスに組み込めるかといったところについては、建築業界に限らず色々なところで色々なプロジェクトがあって、それぞれ関わっている人たちについてまとめていく

のに共通な視点なのではないかと思ひまして、こういうふうな考え方で、もっとより良いものができていくのかなと感じました。

また、吉村先生のところで、建築もそうなのですが、その土地を見ながらある程度、組み立てていくのに対して、ランドスケープはもっとさらに元々の土地の力みみたいなデザインを組み立てていくというのに対して、最初のインスピレーションが落ちてくれば、すごく良いものができるかもしれないけれど、それが落ちてくるまでの苦しみみたいなものをどうやって解決するのかというのを途中で聞きたくなりました。

佐々木 今、ちょっとダイレクトな質問が出たので、吉村さん、いかがですか。

吉村 運です(笑)。申し訳ないけれど、運です。図面に向かってエスキースしていると、あまり考えないで紙に描くので、運がいいといろいろなものがピタピタと合ってきて、知らない間にまとまってくるというのがあって、だからデザインは運だと思います。

佐々木 そんな、はぐらかさないで。

吉村 いや、本当にそういうところはあると思います。ただ、その場所に行ったときのファーストインプレッションとか、さっき植村直己をご紹介しましたけれども、あそこに行ったときは本当にもうこれしかないなという感じでした。何をやらねばいいかということ、その敷地が教えてくれている感じだったので、帰りの電車の中でスケッチをしたのですが、今できているものとあまり変わっていないです。だから、最初に受けた印象がとても大切だなと思います。

佐々木 ありがとうございます。私の話にもぶつけていただきましたが、今回のシンポジウムのキーワード、大事なものがたくさん入っていますが、一つは「場の力で多様な価値を繋ぐ」の多様ということですね。水越さんのお話の中で東京は本当にばらばらな、東京に限らずですが、個別の敷地でみんなばらばらで、それぞれの意図をまとめることはできないという話もありましたし、北野さんは世間で言えば学生とくくりにはできるけれども、それはとてもくくりできないようないろいろな、学生だけではなく、大学は教員もいるから、意外と多様な人たちが集まっている。吉村さんは最後のところで、繋ぐというのは異なっているから、その異なりがあるから繋ぐという行為が出てくる。そもそも違うものが隣接しているということが大事だという話。

笠原さんは設計が終わってふたを開けてみたら、想定と違うような使われ方だったり、それぞれのユーザーさんも先生はこう使って使うしという、つまり異なるもの、多様なものということはどう考えるかというのがちょっとキーワードになるかなと思って、皆さんのお話を伺っていました。

そのあたりからまず北野さん、多様な学生とか、校友というときの多様なというのを、例えばこういうふうにかテゴライズして、この人とこの人を結んでいこうとか、その多様な人たちの中の交流というのをもうちょっと具体的に大学として考えていったりするということは、どんなふうにお考えなのか伺えると楽しいと思います。

北野 先ほど佐々木先生と吉村先生が異なっているものを認め合うことと繋ぐことを定義されたかと思いますが、まさにそれが重要だと思っていて、今大学では、くくりに学生といっても、早稲田大学には留学生が今7,000人いますので、約1割は留学生です。当然、国籍、言語が違うだけではなくて、思想や信条も、育った背景も違い、そういった学生が、次に社会に出て何をするのかと考えたときには、そのような異なる他者と関わり合いながら、社会の課題を解決していかなければいけない場面に遭遇します。

大学としては、そのような社会に出たときに通用する人材を育てたいと考えていますので、キャンパスはそのための装置と言っておかしいですけども、異なる他者と関わることを体験できるような空間を整備したいと考えています。キャンパスという空間を離れてしまっていますが、例えば今本学では教室での授業だけではなく、実際の地域に学生がグループで訪ね、地域の課題を直接聞いて、それをグループディスカッションし、課題解決策をその地域の方に提供するという授業も行うなど、学生が異なる他者と関わる経験ができる場面を提供しています。

その一方、キャンパスの中では、均質な人間、学生だけが集まる、教員だけが集まるというスペースではなく、そこにお子さんを連れられた方が来ていたり、オフィスワーカーの方が来ていたり、様々な方々が同じ空間を共有していて、そこになにがしかの交流はなくても、それを見ることで何か感じるものが恐らくあるだろう、と考えています。そのような経験をキャンパスの学生にはしてもらいたいという思いから、本日もご紹介したような社会とまちと繋ぐことで、地域の方々をはじめ、様々な方々をキャンパスの中に引き込むような仕掛け、取り組みを行っています。

佐々木 一方で、そうすると今はセキュリティとか管理というところからいくと、リスクを抱え込むことになる訳ですよ。私は理工学部にいますが、早稲田は比較的まだオープンな方ですが、他の大学はかなりそこがうるさくなってきたりしているけれども、そこを割とおおらかでいられている理由は何なんですか。

北野 そうですね。施設管理側からすると、本当に閉じて中だけで解決したいというところになるのですが、まずキャンパスを社会に対し開けられるようになった理由は二つ考えられます。戸山キャンパスが閉鎖的だったのは、やはり学生運動がきっかけでして、学生のサークル活動機能と教育研究機能が分断されていたことも同様ですが、そのような内なる障害がなくなってきたということが一つあります。もう一つは、大学だけではないと思うのですが、セキュリティを高めたい、あるいはここからは限られた人間だけのスペースにしたいというところは必ずあります。しかし、そういうものが比較的建物側だけ、建物のこの部分だけというような形で、施設ハード的にコントロールできるようになり、それによりオープンにできる場所はパブリックなスペースにできるようになってきているからだと思います。

佐々木 設計側ではそのことについて何かありますか。

水越 私自身、早稲田大学の設計をだいぶ長くやってきているのですが、最初の頃はセキュリティという概念があまりない時期もあったのですが、ここのところはだんだんうるさくなってきているのは事実です。アリーナに関しては、かなりいろいろなモードがつくられています。休日はこちらには人を入れては駄目だからとか、入試の時はこのようにしたいだとか、ということで、曜日や時間等、利用形態に応じた6パターンぐらいのセキュリティラインを電気錠でつくっています。最初は大学から提示される条件が複雑すぎて、話を聞いても何を言っているか分からないといった状況で、結果的にはセキュリティラインを図面に書いてみて、こういうことなんですかというのを確認しながら、それぞれのモードをつくりました。そんなことがあって、今はそれを上手く運用して頂いているという感じです。

佐々木 それはちょっと守りの話なので、守りの話をしているよりも、開いていくとか、異なる人たちをどうぶつけていくとか、そういうことはこの一連のプロジェクトの中でどんなふう話題として上る形に結び付いていったんですか。

水越 そもそも私自身、設計初期段階では、ここまで、日曜日も皆さんがフリーで入れるようになるとは思っていなかったのです。このキャンパスはオープンスペースが少ないなというのは、すごく感じていて、村野先生の校舎は隠れてしまっていて、それもあまり良くないなと思っていました。早稲田の新しいシンボルはそもそも何なんだろうとか、今はオンデマンドでも授業が見られてしまうので、大学に来る意味みたいなものをつくらないと、全然おもしろくないみたいなのところがあって、ここに来たから活動に参加できましたみたいな場所をつくりたいと思いました。

それを具現化していく中で、今回のように建物を地下に埋めて、その表面に大きな庭があるようなスケッチを描いて大学にお出ししました。そもそも、文学部の先生はうるさきが多いので、すぐ否決されるパターンというのがあるわけです。それ以前にもスケッチを出したら、即時ダメ出しなんてこともあったのですが、今回は意外にも北野課長から、今度のやつは庭だからうけたというわけです。あれは建物ではないと。

どうもここで分かったのは、建物だと結構好き嫌いが出るとですね。あのデザインが嫌とか。こんなのが良いとか。でも、僕らがここでやりたかったのは、僕も早稲田の建築のOBだし、村野先生の建物の前に建てるプレッシャーもあったりしたうえで、竣工後にOBの方々から色々たたかれるのは嫌だと思っていて、その結果、これは「ステルス戦闘機のような建築」と言っているのですが、性能は高いですが姿は見えないというのをやるのが良いのではないかと思います。それで、そんなコンセプトのスケッチを出したところ、皆さんからの反応として、これを建てるんだったらいいよと言っていると。これは早稲田大学の中では画期的に珍しいことなんです。批判する方が多いので。

その様子を見た時に、どうもみんなの欲しかったのは建物ではなく、オープンスペースというか自由に使えるスペースな

んだと理解し、その中からこの建築をどう詰めていこうかなと考えました。その結果、このようなことを具現化するには、自分たちの力だけでは足りないので、ランドスケープアーキテクトや様々な専門家にも入ってもらってもっと広い視点でやるといいのではないかとことを考えはじめました。だからこのプロジェクトはかなり特殊なプロジェクトですが、この経験で分かったのは、1枚のスケッチ、手描きのフリーハンドのスケッチみたいなものから始まっているのですが、そこに庭が描かれているということと、アリーナはその下に置いてありますよという情報だけで、多くの人が賛同してくれて始めてしまうという結構不思議な始まり方をしたので、それは新しい公共性の作り方かなと思いました。

佐々木 非常に面白いですね。たぶん、その曖昧なスケッチを見て思い描いたものは、たぶん、みんなちょっとずれていたんだと思います。でも、そこにあるこれだったらいいんじゃない…というふわっとした共有可能性が込められていたということかもしれないですね。それがだんだんフィジカルに丸なのか、四角なのか、木はどこに植えるんだという具体の形を吉村さんが図面上に落としていって決定していく訳ですが、そのプロセスの中ではみんなのふわっとした思いとか、ちょっとずつずれている人たちのまなざしを受け止めるために、こうデザインしたみたいなのところはありますか。

吉村 言い方にちょっと語弊があるかもしれませんが、みんなに喜んでもらうためにデザインを僕はきっとしてないと思います。僕がそういうところに行きたいなというようなそんな場所をつくりたいと思って、芝生の斜面は気持ちいいです。平らなところには座らないけれど、芝生の斜面は気持ちいい。いろいろな方向を向いて座りたいとか、そんな思いがあると球体の一部が顔を出しているようなデザインになってきます。また、僕は素材やディテールが大好きで、金属のベンチとか、斜めの張り出した「へさき」みたいな場所とか、そういう自分が見てみたい風景をみんなに好きになりそうだよということで提示して、それが運よく受け入れられたということです。

佐々木 「私、めっちゃ気に入ってるの。どう？ これいいでしょう！」というやつですね。やはりそういうことは説得力があるんですよ。きっと吉村さんが、私が好きというものがこれまでの色々ご経験から非常に深いところから来ている私の好き、私の居心地のいい、だったと思うので、結局受け入れられたのかなと思います。単なる「これが私のやり方だから、それをみんな、どう？」ではなく、私がいろいろなところを体験され、そこで設計されて、血となり肉となった身体感覚から来ている吉村さんの感覚がずっと差し出されたから、みんないいねと思ったのではないかと思います。

吉村 すごいほめてもらった。

佐々木 笠原さんは本当に縁の下ですっていろいろ支えて頂いているお仕事ですが、それがなければまったく成り立たないですよ。今までの文脈と違う視点からでもいいですが、どういうアプローチでこのプロジェクトに関わりつつ、何かやらなければいけないことがあると最後におっしゃってしま

たが、そこについてちょっと伺えれば。

笠原 一番最初に水越さんから紹介頂きましたように、うちの会社としては実施設計から一緒にやるような形になっていまして、基本設計の部分は山下設計さんがつくられているところから、その思想を実現するには、まずどうしていけば良いかということと、またより良くするためにはどうすれば良いかということで、打ち合わせをする時間がすごく長くかかったのですが、それによっていろいろ共通のベクトルをつかまえることができたことが、このプロジェクトを進めるうえで一番大きかったことだと私自身は思っています。

佐々木 それは当たり前のことではないんですか。このプロジェクトではちょっと違うんですか。他に比べて特にすごかったのですか？

笠原 ちょっと特殊な形態をしているというところもあって、条件もいろいろ厳しいところもありましたので、普通に地上で建てるよりも苦勞するところがすごく多くて、設備的にも建築的にも解決すべき問題が多くありました。そのために色々な議論をして、より良い方法をみんなで探したということかなと思います。

水越 実はこの間、意外なことがあって、とある設備の専門家の方が見学にいらっちゃって、僕らが設計内容を説明したんです。僕はこのアリーナでは地中熱をダイレクトに使うということとか、断熱しないでやるということが最も合理的な方法だと思って、基本設計の段階からそのような主旨で説明していたんですね。私自身、みんな、これに合意して設計を進めていたと思っていたのですが、そうしたら見学会の最中に突然、笠原さんが、「この建物の設計手法は相当変わっています」と言い始めたんです。僕は合理的な思想で設計を進めているつもりだったんですが、どうもそういうことではなかったらしく、とても特殊な思想を設備チームの人達が頑張って受け継いでくれていたらしくて、熱の使い方や貯め方が特殊だったみたいなんですよ。

それが竣工してから分かるというのはちょっとびっくりなのと、さっきグラフをお見せしましたけれども、僕らは ZEB Ready の認証を受けているので、設計スペックとしてはエネルギーを半分以下にしていますし、実際は省エネ法では評価できない部分もあるので、もっと少ないエネルギーで運営できるはずだったのですが、いざ、使ってみると、スポーツの先生はいつも試合みたいな感じの照明がいいですとか言って、1,000ルクスのスイッチが簡単に押されてしまったりして、毎日リアルタイムでデータを取っているんで分かったのですが、今大学にこれをどう捉えるかと投げかけているんです。

というのも、早稲田大学は公式ホームページでゼロエネルギーアリーナと ZEB Ready の認証取得の二つを掲げてきたんですね。ホームページに早稲田の新しいシンボルはそういうことができ、持続性が高いんですと掲げたにもかかわらず、できあがった途端に、競技スポーツ環境として最高ですというのを前に出して、前のキーワードを引っ込めるみたいなのは良くないんじゃないですか、と突っ込んでいます。

今日の課題でいうと、持続性が高い建築とか、どう持続して

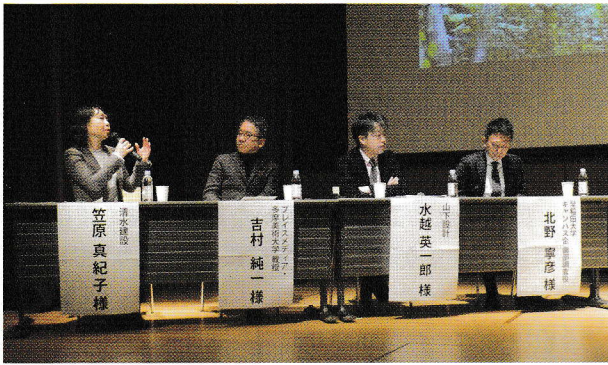
いくかというときに、最初につくった思想と運用が本当にあっているのかどうかという検証も必要ですし、あと省エネ法の問題でいうと、最初の設定が本当に正しいのかというのがあって、300ルクスは JIS の基準ではありますが、確かに暗い感じがします。

これと同時に、どういうふうに使っていかうかとか、何が大事なのかというのをクライアントと共有したり、それからずれてきたときに、修正することがすごく大事だと思います。このところ、私たちの建物が ZEB Ready を謳ってしまっていることもあって、東京都とかいろいろなところから ZEB の建物として講演会を頼まれているのですが、それに行くたびに、ちょっと運用が上手くいっていないで…という説明をしています。何故そのような説明をやっているかというのと、どうも世の中では上手くいっているふりをしているけれども、上手くいっていない事例がたくさんあるんだろなあ…と思っているのと、発表することによって、早稲田大学がやらざるを得なくなるのではないかという期待を込めていて、今もお願いしているところです。それこそ多様性ではないのですが、大学の中にも環境みたいなものを司っていて、エネルギーを小さくしなければいけない部署の人もいれば、スポーツで成果を上げなければいけない部署の人もいて、部署ごとにまったく違う意見みたいなんです。

それを統合していくこととか、共有していくことが今の社会に求められていることで、立場が違う人からすれば、自分がやっていることが一番良いと思ってやってくれているわけです。だから競技スポーツセンターの人からしたら、最高のスポーツ環境でオリンピック選手をつくれればいいんでしょうとかと言って 1,000ルクスを押します。一方で、総務の人からしたら、ランニングコストを使い過ぎているからなんとかとしたりとか、環境の方からすると、文科省に報告できないから困るとか、いろいろな利害があるのだと思いますが、それをどういうふうに統合していくのかとか、どういうふうに共有していくのかというのが結構課題なのではないかと思っています。それについては、皆さんどう考えているのかを少し聞きたいと思います。

佐々木 北野さん、これはそれこそ学生に課題として与えるにはすごく良い。みんなどうしたらいいか。社会問題を解決して、ある種トレーニングをして考えていくという非常に良い課題だと思いますが、環境の負荷のコントロールの問題もそうですし、私がちょっと気になっているのは、非常にみんな





居心地よく使っているわけだけど、例えば草刈りは自分たちでやろうとか、芝刈りをやろうとか、何かここをうまくマネジメントする、主体的にマネジメントに関わっていくグループが生まれたりしないのか。あるいは、それを生むような刺激を大学側としてはとっていかないのかというあたりが気になるのですが、いかがですか。

北野 非常に貴重な提案を頂いたと思います。先ほど笠原さんがおっしゃっていた設計チームでベクトルを合わせてというところ、そのベクトルがクライアントの、もしかしたら私のところまでは合っていたのかもしれないですが、クライアントとエンドユーザーが違うという、さらに本学のように組織が大きくなってしまうと、なかなかそのベクトルがエンドユーザーまで伝えきれていないというのが、今回、非常に課題として表出したなと思っています。

今回の早稲田アリーナは、先ほど笠原さんもおっしゃっていたとおり、特殊なことをやっているの、このような検証をしっかりとやっているため、実態が乖離しているというのが見えてくるのですが、通常、建てている建物では検証を必ずしも行っていないので、おそらく先ほど水越さんもおっしゃったとおり、乖離している建物はいっぱいあるのではないかと考えています。どのようなやり方が一番良いのか考えなければならぬと思いますが、エンドユーザーである学生、教員が最もふさわしい利用の仕方までを自ら考える、というところまで出来れば良いなと今考えています。

緑の管理、芝刈り、と佐々木先生がおっしゃいましたが、大学はなかなか緑の管理に潤沢な予算をかけられるようなところではないので、もともとこの設計のコンセプトとして、できるだけ手のかからない植栽を考えてくださいというのが設計チームにお出しした植栽に対する最初の要望です。それを実現いただいているのですが、一方で当然芝刈りはしなければいけないです。実は今年の夏も伸び放題に伸びて、後期の授業開始のときには刈らなければいけなかったのですが、刈ったらほとんど根っこというか、日が当たらない状態になっていたの、枯れていたように見えていたのですが、今はきれいに戻っています。

まさに先ほど佐々木先生がおっしゃったように、この戸山の丘を学生が本当に気持ちよく使ってくれていて、これを自分たちでもっといい環境を維持していきたいという空気が生まれてきて、ここの管理をみんなでやっていこうという学生グループが出てくるというのが本当にそれこそ持続性のある

キャンパスではないかと思しますので、ぜひ検討したいと思います。

水越 実は僕らは担当の方と打ち合わせている中で、学生の環境活動の中で、こういうサークル活動でやれる人はいませんかと色々お願いしているところですが、そこはまだ実現できず、やっと1年たってきたところで、これからやってもらおうと思うのですが。一方で感心したことがあって、僕も早稲田のOBなのでこれを作ったときに、「戸山の丘」のスロープでスケボーをする奴がいるんじゃないか…とか、むちゃくちゃな使い方をして、あっという間に使用禁止になる可能性を少し感じていました。

ただ、その心配は無用で、実際には非常にうまく使ってくれていて、思った以上に上手に使ってくれているので、使用禁止がないというのは自慢です。次のステップとしては、それを維持できるかどうかポイントだなと思っていて、ファーストステップとしては、使用禁止箇所がなくてよかった。たぶんスケボーをやられたら一発でスロープに変なパイロンとかを置かれるかなと思ったのですが、それはないということですね(笑)。

北野 そうですね。あと当初、実は心配していたのは、ちょうど下側にある池、水たまり、ここに小さなお子さんが来るので、中で溺れてしまうとか、そういうことを考えると、あそこに立ち入り禁止の柵をしたいとか、そういう話が出て欲しくないなと私も考えていて、幸い、そういった声はまだ今のところ出ていませんで、この環境のまま維持したいと思っています。

もう一つ、金属のベンチですが、実は私がたまたま見に行っていたときに、小さなお子さんが走り回っていて、キャンティ形状のため座面が出っ張っているのに気づかずに当たって転んでいたのですけれども、ああいうことが続くと、これは危ないとかなくなってしまっただけで困ってしまうのも嫌だなと思いますので、是非この環境を大学としても維持していきたいと考えています。

佐々木 ありがとうございます。私は土木分野なので川のデザイン、橋のデザインなどをやっているときに、もし誰かが何かしたら、そういうことがいつも出てきている中で、その場の使い方が上手になっていく人が育たないという環境やいい場は生まれないと感じています。早稲田アリーナは上手に、あるいは丁寧に大事に使う人が育つような方向で今ところスタートしている感じがあるので、そのベクトルをぜひ今後も維持できるように、事故とかトラブルは当然起きてきますけれども、それにすぐ過剰反応しないで、おおらかにそういうこともあるけれど、この伸び伸びした感はやっぱ大事だから、みんなで今度からは気を付けて使おうねみたいな、そういう雰囲気がきっと生まれてくるようなポテンシャルを持っているデザインであり、空間であり、いいスタートが切れたかなと思っています。

先ほどマネジメントみたいなことを学生にさせたらとか、学生に自主的にやってもらったらということを申し上げましたが、それは何か組織としてグループを作って彼らがや

るという明示的な形だけではなくて、ここに来た人、一人一人がなんとなくここで使うものとしての常識感みたいなもの、当然ごみは捨てていかないとか、そういうコンセンサスが育っていくような場であるよということを、何かのときにちょっとみんなに伝えたりすることがいいフィードバックになって、ユーザーと空間をともに育てていく、まさに力をもった場になっていくのかなと期待しています。その初期値にふさわしいエレメントをちゃんと吉村さんなり、水越さんたちが設計者として提供していただいたのかなと、とても楽しいプロジェクトだなと思って見えています。

せっかくですので、もしフロアのほうから何かご質問なり、コメントをいただければと思いますが、いかがでしょうか。

今日は学生以上に静かなオーディエンスの方々がおそろいのようなので、もう少し壇上でお時間を頂くとして、もう一つ、今日のテーマが「場の力」ということですね。すでに今申し上げたような、この場に来ると、みんなが思い思い、でも、使っている他者に配慮しながら振る舞いをするというような感性を引き出す、そういう意味では、既に場の力を持っているというふうに思いましたが、もう一点は既にプレゼンテーションの中でも何度も出てきている都市としての立地ということですね。折角そういうある程度マクロな文脈を読み込んでつくって頂いたものなので、ここからもうちょっと敷地外に向かって、何かこの場の力を伝播させるようなことができるいいなと思いますが、何かアイデアあるいは、実はそういうことを狙っていたんだよというお考えがあれば伺いたいと思います。どうですか。

水越 今日の僕のスライドで、「一つの建築で何ができますか」ということを聞かしている訳ですが、さっきの議論の中でも出てきたコンセンサスのようなもの、上手に使うとかいうコンセンサスというのは興味深い言葉だと思っていて、どういうコンセンサスを生み出せるかというのが大切なんだと思います。例えば、駅のトイレを思い出して頂くと、10年前とか20年前は駅のトイレはすごく汚いイメージがあったじゃないですか。あの時代の皆さんの使い方は汚い場所だから雑に使うということが一般的だったのが、ここ数年来、すごく綺麗になってきて、空間が良くなると、その作法も変わってしまうということがあると思います。

一つの建築は、物理的にはその敷地の中でどうしても建物として完結しなければいけないんだけど、影響度として何か発信できるようなものづくり方はしているつもりです。あの場所の隣に何か建てる時にどうしたらいいかと皆さんが考えていくんだと思います。良質なまちというのは高いレベルのコンセンサスが保てているような環境がつくられていけば、そういうものができてくるでしょうし、やっぱり雑多だなというイメージが出てきてしまうと、そういうレベルのものが出てくるのではないかとということで、個々の繋がりみたいなものは、常に隣との関係を見ながらやっていくなどもあって、敷地の中だけ見ているようなことではやはり駄目だと思います。

各設計者がその場所をどう捉えていくかということによ

て、何か出てくるのではないかというのと、冒頭、佐々木先生のスライドの中でさまざまな工夫をしなければ大切なものは見えませんというのは、僕もよく建築家の仕事の一つは、普段ポーッとしていると見えないことを、何か建築の操作をすることによって見せてあげることなのではないかと思っています。ここでも今まであまり気付いていなかったことを顕在化しているつもりで…そういうことを雑誌にも書いたりしていました。たぶんそういうことの繰り返しが持続性を高めていったりするのかなとか、皆さんの中にあるコンセンサスと言われる共通のマナーみたいなものが上がってこない、持続性は上がっていかないのではないかと思います。そうはいってもテナントビルとか、商業施設の設計の話が来るじゃないですか。そうしたら、絶対クライアントは短期的な経済価値をすぐ追求してくるんですよ。なんだかんだ、環境にも配慮しなければと言葉では皆さんおっしゃるんだけど、いざ、こういうふうにし少しコストをかけてでもやっていいですかという、なかなかそうならないというところがあります。

今日のシンポジウムでは答えは出ませんし、もちろん皆さんの方で考えて欲しいなと思ったのは、そういうことをちゃんと考えていかないと、いつになっても変わらないのではないかな。やはり皆さん短期の利益は欲しいから、そこに目に行くんだけど、でも、どうもそれでは駄目だ。それを改善するために、また何かポイント制度みたいなものをしないとできないのかどうかというあたりが結構気になっているところで、建築とか都市に携わっている人間がもう少し合理的なものの捉え方をしていけば、少しずつ変わっていくのではないかなとは思いますが、このあたりは吉村さん、どうですか。

吉村 ちょっと難しく分からない(笑)。竣工してから、皆さんが使い始めてから、あそこにごみ箱を置いて頂いたんです。今日も見学して下さった方から、いいですねとほめられて、ゴミ箱がミラーになっているんです。ステンレス。そうすると、緑を映し込んで、そのごみ箱が消えるんです。僕がやりましたと言えばよかったですけど、そうではなくて、大学の方で選んで頂いたんです。ということは、大学であそこに置くにはこういうものであった方がいいと考えて頂いたようなんです。あの場はそうやってみんなが思いを馳せていけば、どんどん熟してよくなっていくのではないかと考えています。

佐々木 ありがとうございます。笠原さん、何かありますか。

笠原 今までを振り返っても、この場というか、ここに人がこれだけ集まってくるというのは、それだけの魅力があって、それだけの価値があって、それをまたみんながいいなと思ってくれているところというのは、また次に発展していく力になるのだろうと、今日、色々な話を聞いていて思いました。

佐々木 もう時間がないので、クライアントであり、たぶん一番大事な仕事を回してきたマネージャーとしての北野さん。最初にあった、これから早稲田をもっとまちにも開いていくというような文脈にも重ねて、次、どんなことを考えていきたいか、教えていただければいいなと思います。

北野 周辺地域や行政の皆さんと連携して魅力的なユニバーシティタウンを実現したい、と言ってしまったのですが、

実は学内のコンセンサスは一切取っていないので、私案になってしまうのですが、整備の方針としては冒頭ご紹介した通り、大学としての考え方に沿ったものですので是非実現したいと考えています。一方、早稲田大学がこの場所にあることの意義といえますか、この場所でなければいけないといったようなものが、実は最近失われてきてしまっているのではないかと考えています。学生は自分の家とキャンパスを往復するだけで、その途中にキャンパスの周辺に立ち寄るといことが実はなくなって、周辺の商店街は本当に要るのかというように、学生の実態を見ていると感じてしまうところですが、それは非常にもったいないことです。

早稲田大学は周辺に商店街があって、良い環境が周りにあるのに、その環境を上手く活かし切れていないですし、学生が使っていないです。ただ、それは学生だけの問題ではなくて、大学、あるいはまちをつくる側の問題なのではないかと思っています。そのため、大学としてはキャンパス内だけを綺麗にまとめていけばいい、あるいはキャンパス内にパブリックなスペースをつくって、周辺の方々をそこに招き入れるようにすればいいということだけでは十分でないと思っています。魅力的なまちがキャンパスの周りにあって、そこがキャンパスと一体となっているような都市空間が、この早稲田の地の将来形として大学が目指すべきところではないかと思っています。それはなかなか大学だけでは取り組めない大きな課題です。

その時、大学が魅力的なまちをつくって行きましょう、と言ったときに、大学のふるまいが問題でして、早稲田はキャンパス内で何をやっているのですかということと言われるようなものをつくってはいけないという思いがあります。そのような意味では、この早稲田アリーナはこういうものを大学はキャンパスの中につくり、さらに、まちを良くしたいと言う事ができますので、周辺地域や行政の皆さんと一緒に早稲田のまちを魅力的なまちにしていければと考えています。

佐々木 ありがとうございます。まとめみたいなことができる感じでもないのですが、今日はたまたま早稲田トークになってしまったところがありますが、「模範的国民」というのは早稲田大学の理念にもございましたが、本当に良いものをつくっていくということの影響を信じてやっていくということが、建築、都市に関わる人間の一番大事なことであって、それは誰かのために当然いいものなのですが、その誰かというのが抽象的な学生とか住民ではなく、やはり一人一人の私というリアリティをもった、でも非常に深い考察を得た私のイメージというものから、水越さんが最初におっしゃったように、一個一個の建築、一つ一つの敷地でやっていくと、必ずそれは繋がっていくというのがある。楽観的な、でも希望を持ってものをつくっていくしかないのかなと思います。その良い事例として、あるいは先駆的な事例として、この早稲田アリーナをこれからも育てていかなければいけないという気がしたと私は思っています。早稲田にいる人間として私も何かそういう目で見続けていければと思っております。

特段、まとめにはなってはおりませんが、今日この

プロジェクトに関わった四方のリアルなお話を交えて少し何か皆さんの考え方に新しいヒントが得られれば幸せだと思っています。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

司会 登壇者の皆さま、本日は本当にありがとうございました。今一度、登壇者の皆さまに大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

本日は大変お忙しい中、aaca 景観シンポジウムにお越しいただき誠にありがとうございました。以上でシンポジウムを終了させていただきます。



aaca 景観シンポジウム

「場の力で多様な価値を繋ぐ」

未来に向け、私達はどのような価値基準で建
築・都市を考えるのか？

～早稲田アリーナ等を通じて～

発行 2020年3月31日

発行者 一般社団法人 日本建築美術工芸協会

www.aacajp.com

〒108-0014

東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階

TEL 03-3457-7998

FAX 03-3457-1598

E-mail info@aacajp.com

この記録誌は、当日収録された音声テープ並びに使用された画像、
配付資料から編集されたものです。無断転載を禁じます。
